

# 外部評価報告書

令和8年2月

京都大学

総合人間学部／大学院人間・環境学研究科



## はしがき

大学院人間・環境学研究科は、京都大学における最初の独立大学院として1991（平成3）年に設置されました。旧制第三高等学校を前進とする旧京都大学教養部を母体とし、「人間と環境とのさまざまな関わりを明らかにするとともに、その望ましい関わり方を実現する新しい科学・技術と人間のあり方の原理的な研究を遂行すること」を目指す教育研究組織としてスタートしました。1997（平成9）年までに、人間・環境学専攻、文化・地域環境学専攻、環境相関研究専攻の3専攻27分野体制を整えました。

総合人間学部は、翌年の1992（平成4）年に京都大学の10番目の学部として、同じく旧教養部を母体として設置されました。「各専門分野に限定された個別的研究・教育を超え、自然と調和した人間の全体的形成」を目標とし、「人間存在を、人間の内面的な心理、価値や思想の面、あるいは身体面からだけでなく、人間のおかれた社会、政治、経済、文化、歴史的環境、さらには、物質や生物などの自然環境との関係を含めて、総合的に理解しようとする」ことを研究教育の目的として、人間学科、国際文化学科、基礎科学科、自然環境学科の4学科、13分野体制を整えました。従来型の個別分野の専門教育、専門家養成を超える新しい学部教育のあり方を探り求め、大学入学後に、学生みずからが自由に主専攻を選択できる仕組みや、副専攻制度を設けて、主専攻のほかに、学生に各自の専門分野以外の特定の分野を系統的に履修させる特徴的な学部教育に取り組んできました。

人間・環境学研究科と総合人間学部は、2003（平成15）年の組織再編により一体となりました。人間・環境学研究科は、共生人間学、共生文明学、相関環境学の3専攻14講座体制に、また、総合人間学部は、1学科5学系（人間科学系、認知情報学系、国際文明学系、文化環境学系、自然科学系）体制に再編されました。これにより、格段に幅広い「専門知」を集結し、一丸となって「統合知」を目指す高いレベルの教育研究体制を整えました。2023（令和5）年には、人間・環境学研究科を、「教養知」を基盤とした学術架橋力を備え、「総合知」の創出と活用に貢献できる人物の育成を目指し1専攻10講座に再編しました。「総合知」を社会実装することを通じて学際教育研究の高度化をはかり、社会の変化や社会課題に応じた柔軟な連携や再編成が可能な教育研究体制を整備しました。さらに、2024（令和6）年には、総合人間学部の研究教育体制を人間・環境学研究科と同様に1学科10講座に再編し、学部と大学院の接続強化を図りました。これらの再編を通じて、現在も新たな研究教育のあり方について継続的に模索を続けています。

このたび、本学部・研究科の教育研究水準の向上をはかるため、組織再編前後の2020年（令和2年）度～2024年（令和6年）度までの教育・研究活動にかかる自己点検・評価報告書等の資料を踏まえ、学部・研究科の目的に照らして、取組や活動、成果の状況がどの程度の質にあるのか、4名の学外の有識者に外部評価していただきました。4名の外部評価委員は各界においてご活躍の方々ばかりで、ご多忙にもかかわらず本学部・研究科の外部評価を快くお引き受けいただき、令和7年10月24日の外部評価委員会への出席や後日提出の評価書などを通して、数多くの貴重なご意見を頂戴しました。改組後の本学部・研究科の理念である「学術越境」の意義を深く汲み取っていただき、温かい励ましとともに、鋭いご指摘を賜りましたことに、この場を借りて心より御礼申し上げます。

本報告書は、外部評価委員会の当日の議事録や配布資料と後日各委員より提出された評価書を収めたものです。評価書では、本研究科・学部の教育活動やその成果、研究活動について、厳正かつ多角的な視点からご評価をいただいております。委員の先生方からは、学部教育や研究の水準に対して「高い質にある」との過大な評価をいただく一方で、学生のキャリアパスに関する課

題や、「学術越境」の理念の浸透度など、今後の発展に向けた極めて重要なご提言も頂戴いたしました。私たちは、今回いただいた貴重なご意見・ご提言を真摯に受け止め、今後の教育研究活動の改善に生かしていく所存です。本報告書が、本学部・研究科の現状と課題を広く共有し、より良き未来を築くための礎となることを願っております。

最後に、日頃より本研究科・学部の活動にご理解とご支援をいただいている関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

令和8年2月

京都大学総合人間学部長／大学院人間・環境学研究科長  
宮下 英明

## 目次

はしがき .....	1
1. 外部評価委員会プログラム .....	4
2. 外部評価委員会委員名簿 .....	5
3. 京都大学大学院人間・環境学研究科外部評価の実施に関する内規 .....	6
4. 外部評価の目的と評価項目 .....	6
5. 外部評価委員会 議事録 .....	7
6. 外部評価委員からの評価書 .....	32
7. 外部評価委員会配布資料 .....	40
(1)人環レビュー 教育・研究活動に係る自己点検・評価報告書 令和7年9月	
(2)京都大学総合人間学部パンフレット	
(3)京都大学大学院人間・環境学研究科パンフレット 2025-2026(令和7-8)	
(4)総合人間学部便覧(令和6年度以降入学者用) 令和7年度	
(5)総合人間学部履修モデル&教員プロフィール(講座版) 令和7年度	
(6)大学院人間・環境学研究科学生便覧 令和7年度	
(7)総人・人環フォーラム	
(8)プレゼンテーション資料	
①大学院人間・環境学研究科/総合人間学部の概要と取り組み.....	41
②総合人間学部 学部の教育面での特色ある取り組みについて.....	51
③人間・環境学研究科 大学院教育における特色ある取り組み.....	60
④学術越境センター.....	66
⑤大学院人間・環境学研究科の研究面での取り組み.....	72

# 1. 外部評価委員会プログラム

日時：令和7年10月24日（金）10:00-16:00

場所： 京都大学大学院人間・環境学研究科棟 105会議室 他（ハイブリッドにて開催）

**10:00-11:45** 【進行：小木曾副研究科長】 於： 105会議室（1階）

○研究科長挨拶

○人間・環境学研究科出席者自己紹介

宮下英明研究科長、小木曾哲副研究科長、佐藤義之副研究科長

佐野亘自己点検・評価委員長、佐野宏学部教務委員長、神崎素樹大学院教務委員長

○外部評価委員会委員紹介

近藤和行委員、近藤真委員 里見朋香委員（ZOOM参加）

○配布資料及び本日のスケジュールの説明

○委員長の決定（互選）

○人間・環境学研究科及び総合人間学部の概要及び組織再編についての説明【宮下研究科長】

○総合人間学部の教育面での特色ある取り組みの紹介【佐野学部教務委員長】

○大学院人間・環境学研究科の教育面での特色ある取り組みの紹介【神崎大学院教務委員長】

○意見交換・質疑応答

**12:00-13:00** 意見交換（昼食を兼ねて） 於： 105会議室

出席者：近藤和行委員、近藤真委員 里見朋香委員（ZOOM参加）

宮下研究科長、小木曾副研究科長、佐藤副研究科長

佐野亘自己点検・評価委員長、佐野宏学部教務委員長、神崎大学院教務委員長

**13:15-14:15** 学生との懇談 於： 学術越境センター（5階）

出席者：近藤和行委員、近藤真委員 里見朋香委員（ZOOM参加）

（冒頭のみ）宮下研究科長、佐野学部教務委員長、神崎大学院教務委員長

13:15-13:45 学部生5名との懇談

13:45-14:15 大学院生5名との懇談

**14:30-16:00** 於： 105会議室

出席者：近藤和行委員、近藤真委員 里見朋香委員（ZOOM参加）

宮下研究科長、齋木潤副研究科長、神崎大学院教務委員長、

（15:00～）佐野亘自己点検・評価委員長

○学術越境センターについて紹介【齋木副研究科長・学術越境センター長】

○研究科の研究面での取り組みの紹介【宮下研究科長】

○質疑応答・意見交換

○評価書の提出依頼及び外部評価報告書の構成の確認

## 2. 外部評価委員会委員名簿

令和7年7月15日現在

(50音順)

氏名	現職（前歴）
近藤和行	BSイレブン（日本BS放送株式会社）代表取締役社長、元読売新聞東京本社論説委員・編集委員
近藤 真	静岡大学情報学部教授、同大学元副学長(国際戦略担当)
里見朋香	放送大学学園理事
松永 是	国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）アドバイザー

### 3. 京都大学大学院人間・環境学研究科外部評価の実施に関する内規

(令和6年9月5日研究科長裁定)

- 第1条 この内規は、人間・環境学研究科及び総合人間学部（以下「研究科等」という。）における教育研究活動等の外部評価の実施について必要な事項を定めるものとする。
- 第2条 研究科等の教育研究水準の向上をはかり、外部の視点から評価を実施するため、外部評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。
- 第3条 委員会は、研究科等における教育研究活動等について評価を実施する。
- 2 評価は研究科等が別途定める時期に実施する。
- 第4条 委員会は、外部の有識者3名から5名程度で組織する。
- 2 委員は研究科長が委嘱する。
- 3 委員の任期は、委嘱した日から1年間とする。
- 第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により選出する。
- 2 委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長が指名する委員がその職務を代行する。
- 第6条 委員会は、必要と認めるときは、委員以外の者を委員会に出席させて説明又は意見を聴くことができる。
- 第7条 委員会の事務は、人間・環境学研究科事務部において処理する。
- 第8条 この内規に定めるもののほか、委員会の運営その他必要な事項は、委員会が定める。

#### 附 則

この内規は、令和6年9月5日から施行する。

### 4. 外部評価の目的と評価項目

#### 1. 外部評価の目的

大学院人間・環境学研究科及び総合人間学部の教育研究水準の向上をはかるため、令和2年度から令和6年度までの教育・研究活動にかかる自己点検・評価報告書等の資料を踏まえ、研究科・学部の目的に照らして、取組や活動、成果の状況がどの程度の質にあるのか、外部評価していただきます。

#### 2. 評価項目

- 総合人間学部の教育活動の状況
- 総合人間学部の教育成果の状況
- 大学院人間・環境学研究科の教育活動の状況
- 大学院人間・環境学研究科の教育成果の状況
- 大学院人間・環境学研究科の研究活動の状況
- 大学院人間・環境学研究科の研究成果の状況

## 5. 外部評価委員会 議事録

日時：令和7年10月24日（金）10:00～16:00

場所：人間・環境学研究科棟1階 105会議室

出席者： 近藤和行委員、近藤真委員、里見朋香委員(オンライン)

欠席者： 松永是委員

大学側： 宮下英明研究科長、小木曾哲副研究科長、佐藤義之副研究科長、齋木潤副研究科長、佐野亘自己点検・評価委員長、佐野宏学部教務委員長、神崎素樹大学院教務委員長

### 《午前部》 10:00～12:00

議事に先立ち、宮下大学院人間・環境学研究科長兼総合人間学部長から挨拶があり、その後、出席者の自己紹介、本日のスケジュールと配布資料の確認が行われた。

引き続き、委員の互選により、委員長に近藤真委員が選出された。

次に、資料に基づき、宮下研究科長から「人間・環境学研究科／総合人間学部の概要」（資料7-(8)-①）、佐野宏学部教務委員長から「総合人間学部の教育面での特色ある取り組み」（資料7-(8)-②）、神崎大学院教務委員長から「大学院人間・環境学研究科の教育面での特色ある取り組み」（資料7-(8)-③）、学部卒業生、大学院修了生の社会での活躍ぶりについて説明があった後、下記のとおり、各外部評価委員から意見が述べられるとともに質疑応答が行われた。

#### 【意見・質疑応答】

近藤真委員長：

ご説明ありがとうございました。それでは委員の皆様から、まずは順番にご意見や質問をお伺いしたいと思います。近藤和行委員、お聞かせいただけますでしょうか。

近藤和行委員：

はい、ありがとうございます。近藤委員長や里見委員と違って、専門的なところからは外れるかもしれませんが、私は教育を本業としていない立場から、先ほどお話しした経歴の立場から、いろいろお話を伺ったり意見を申し述べたりさせていただけたらいいかなと思っております。

今お話を伺った中で一番興味を持ったというか、素晴らしいことだなと思ったのは、「研究を他者に語る」「研究を他者と語る」です。実際、僕ら新聞記者でもその場面にはよくぶつかりました。経済関係が主でしたが、難しい話を易しく言い換えて一般の読者に伝えないといけないんですが、伝えるというのは、何年何十年やっても難しいところでありました。難しい話を難しい言葉を使って、一応伝える体をとるとするのは非常に簡単なんです、それを易しい言葉に置き換えるというのは常に苦勞しているところです。実際、記事作成でもテレビのコメントでもそうなんです、紙面や時間が限られているところで相手に伝えるということ達成しようとする、難しい

言葉、専門用語を使うのが便利で、どうしてもそちらに逃げてしまうことがありますが、そこをできるだけかみ砕いて伝えるというのは生涯必要なところかなと思います。

里見先生も霞が関にいらしたらおわかりかと思いますが、国会で法案を通すにあたって、頭のすぐ切れる国会議員の先生もいらっしゃるんですが、中にはそもそも政策に興味がなかったり非常に理解力に乏しかったりして、でもこの人を通さないと法案が潰されるとか、審議が回らないというケースもよくあるので、そういうところでも相手に易しく伝えるという能力は求められている。ないとおそらく役所の方々は務まらないところがあるんだろうなと思っています。

その中で、学部生と院生とで「に語る」と「を語る」という2つの方法でやられているということでした。伺いたいのは、その成果というか、他者に語るようなスキルや姿勢とか、それができて、できてないというのは、どのようにして測ってらっしゃるのか。あるいは効果が出たというふうに判断できるのか、あるいは効果が出てないと判断するのか。そのあたりのことをお伺いしたいと思います。それに関連して、先ほど活躍されている卒業生について抽象的な形で説明していただきましたけれども、その「他者に語る」、「他者と語る」に優れた人たちが、傾向として実際に活躍し成功されているのか、あるいは今の段階ではそういう優位な相関関係は見受けられないのかということも含めて教えていただけたらと思います。

もう一つだけ教えていただきたいことは、これは個人的な興味なんですけど、宮下先生の説明で心を病む学生という話がありました。実際京都大学ではどういうことで心を病む学生が多いのか、それは他大学と比べて何か特徴的なことがあるのかどうか教えていただけたら嬉しいなというふうに思います。

#### 宮下研究科長：

ありがとうございます。まず「他者に語る」「他者と語る」は、近年新しく取り組んだ取り組みなので、それを経た学生が卒業後にどういう活躍をしているかは、まだ検証ができないところです。どういう評価をしているかですが、実はそこが我々にとって難しいところです。まずは、自分の言葉でわかりやすく他者に語るということがとても難しいということ、学部生に理解してほしいということがあります。当初の試行段階では、学生に大変評判が悪く、「どうしてこんなことをするんだ」という意見がありました。やはり学生は社会に出てみないとわからない。おそらく最初に学生がぶつかるのは就活の時で、「総合人間学部って何をやる場所？」という質問から始まって、その後に「あなたは何の研究をしていたの？」という質問になると、上手に説明できない学生が多くなっています。京都大学の就活の特徴としては、エントリーシートは通るが、面接で落ちてしまうということがあります。面接で落ちるということは、適切に表現できていないのかなというふうに我々は考えています。どう評価するという点については、まだできていないかもしれません。それが課題になっていると思います。

大学院の「他者と語る」は違った意味があり、学問分野でそれぞれ文化が違うので、その違いを学ぶことが大変大切なことと考えています。例えば僕は理系で生物をやっているんですが、生物の学会での発表の仕方、生物でのいわゆる論文の成果の発表の仕方と、文系での成果の発表の仕方は全部違います。いわゆる学問分野ごとの文化の違いを学ぶということもまず一つ大きなプラサルファとなります。同時に、やはり自分の研究を人に伝えるのは意外と難しい。実は教員

も学部生の研究を聞いたりするんですが、何が面白くてやっているのかなとか、そういうことを常に思ってしまいますし、訊いてしまうこともあります。それは文化が違うせいでもあるので、その文化の違いを知ることとても大事であると思っています。

伝えることが難しいということを感じてもらおうこと、学問分野ごとに実は文化が全然違うんだということを知ってほしいということがあって「他者と語る」を実施しているんですが、どう方法で評価すべきかというのを悩んでいるところではあります。しかし、当初はどうしてこんなことをやるのかとばかり言われましたが、今は学生からの評判は悪くないので、趣旨を少し理解していただけているかなと思います。

学生が病むということについて、これは我々の部局の一つの特徴かもしれませんが、試験は得意だけれど、自分のやりたいことがわからないからここに来ているという学生もある程度います。もう一つ、いろいろなことを学べるからここに来ているという学生もいます。大体1割弱ぐらいなんですが、結局自分が何をやりたいかわからないまま4年生になってしまうという学生がやはり出てきて、どうしたらいいのかということ悩んでしまう学生がそれなりにいます。

京都大学全般の特徴かもしれませんが、目標が京都大学に入学することである学生がやはりそれなりにいます。京都大学に入ったその後は、自分はどうすればいいんだろうと、なかなか自分では考えられない。場合によっては親御さんの意向に従ってしまうケースもあって、なかなか自立できない学生もいます。そういう学生がある段階で悩みを持ってしまうというのが学部生のケースです。

大学院生の場合は、3割ぐらいが総合人間学部から進学するんですが、逆に言うと7割は外部からの進学です。その時に、試験には合格して入ってきたけれども、私はついていけるだろうかという不安をそこで抱えてしまう。なかなか学問に打ち込むことができなかつたりする場合があります。他の大学を卒業した学生が人間・環境学研究科に入ってきて、なんとなく自分のことに自信がなくなってしまう悩んでしまうケースが多いです。

#### **佐野亘自己点検・評価委員長：**

少し補足よろしいですか。教育効果についてのご質問と、病むということについてのご質問ですが、先に病む方から私が見てる感覚で少しお話しします。私はもともと京都大学の法学部を卒業し、京都大学に来る前は京都府立大学で教えていたんですが、まず京都大学のような大きな大学というのは学生が放置されやすい、孤立しやすいです。たくさんの学生がいるので、狭いキャンパスでいつも顔を合わせるというふうにはなかなかならない。しかも総合人間学部というのは、総合人間学部棟というのはありますが、実際は教員の研究室はそれ以外の建物にも散在しています。授業もあちこちの建物の教室でやっています。120人の学生はそれぞれ自分の関心があり、それが120通りありますから、授業で一緒になることはとても少ない。そうすると同じ学部なのに顔を合わせることは1年生の語学の授業ぐらいしかなく、他ではほとんど同じ学部の学生に会わないということがしばしば起きます。

法学部は法学部の建物があって、法学部の授業では大体みんな法学部生が来ていつも顔合わせ

るといふのがあるので、なんとなく仲良くなっていくというのがありますが、総合人間学部ではそういうことすらなかなか起きにくいということが一つあります。理系の場合は、ある程度研究室に入って行って居場所ができて、毎週とか毎日そこに行って実験して、いつも同じ先輩とか、学部生と大学院生が同じ研究室で一緒に研究して居場所ができますが、文系の場合多くの研究室ではそういう場所がありません。たまに文系でも自分たちのラボを持っているところもあるんですが多くはない。特に社会科学系はそういうものがない。そうすると、学生同士のつながりが他の学部より難しくなっている。

もう一つは、このところの学生で印象的なのは、スマートフォンなどいろいろなもののために、ゼミの学生同士がなかなか仲良くなれないことです。以前は、学部のゼミの時に、私が少し遅れて入ってきたりすると、学生が勝手に喋っているというのが普通でしたが、最近はみんなスマホを持っているので、自分のスマホを見ていて会話がないう。私が入ってきてみんな自分のスマホを見ている。大学院生だともう少し賑やかに喋っていますが。

そういう状況を変えるのに、昔はゼミで飲み会をよくしていました。3年生以上だと20歳以上ですので、みんなで飲み会ができました。今はゼミの飲み会ができない、というかしづらいです。お酒がそもそも好きではない学生が多いですし、以前はゼミの飲み会は義務みたいなもので、「来い」と言えたわけですが、今はそれをするとハラスメントになってしまうので義務化できない。

「よかったら来て」みたいな感じになりますが、そうするとみんな来ないです。お酒も必ずしもみんな飲むわけではないので、意外となじみにくい。そうすると孤立しやすい。自分でサークルとか部活とかバイト先で仲間が作れる学生はいいんですけど、それが自分でできない学生は孤立して悩むというのが一つあります。

私が聞いた話で一番面白かったのは、総合人間学部棟というのが正門の入り口を入れてすぐであり、その総合人間学部棟の前にベンチがあるんですが、人と会いたい時はそのベンチにずっと座って、時々知った学生が前を通るので声をかける。ベンチでひたすらみんなで座って、面白そうな人がいたら声をかけるっていうサークルをやっている人たちがいました。そこまでしないと、人間関係が作りにくいところがある。

もう一つの効果についてですが、「研究を他者に語る」、「他者と語る」はまだ始めたばかりなので、はっきりとした効果をお見せしづらいですし、そもそも京大の卒業生は卒業後の進路や活動をたどるのがとても難しくなっています。私立の大学では比較的同窓会組織がしっかりしていて、卒業してからも何かの形で連絡を取っていて、大学もお金をかけて保護者や本人に一生懸命毎年何かをいろいろ送って、ずっとコミュニケーションを保って後を追っていくんですが、特に国立大学では、卒業するときにはどこに就職するかを聞いて、卒業後の連絡先も聞きますが、転職するとわからないし、親（実家）も転居して、どこに行ったか分からない、ということがよくあります。

しかも総合人間学部の卒業生の一つの特徴は、転職する学生が多いことです。それから起業する学生が多い。それから自分で執筆活動みたいなことをしたり、一人で独立してフリーランスで

仕事する学生が多いので、余計に卒業後の活動や活躍を追にくいということがあります。ただし、そういう学生が多いこと自体は総合人間学部の特徴で、もともとそういう人が入ってきているというのもあるし、入ると余計にそれが強められている面があります。

お手元に人環レビューという分厚い資料があると思いますが、一番最後の 190 ページと 191 ページにアンケート結果があります。京大本部が京大の卒業生が就職した会社に対して、京大の卒業生がいるかどうか、いたらこの学部や研究科出身かなどを聞いて、その学生はどういう特徴を持っているかということをいろいろな項目について一個ずつ聞くという大掛かりな調査を令和 5 年にしています。表の右端が京大全体の平均です。これは学部も研究科も関係なく全部の平均をとっています。残り左側の 2 つが総合人間学部の卒業生と人間・環境学研究科の修了生のデータで、受け入れた企業がどう思っているかわかります。それが京大全体と比較できるようになります。見づらいますが、下に行くほど良い、上に行くほど悪いということを示しています。

概ね平均とよく似ているのですが、面白いのは、一番上の総合評価を見ていただくと、京大平均で「良い」と答えている企業が 65%で、総人も人環もそれより低いんです。ところが、個別の項目を見るとだいたい平均より高いです。たまに少し低いのがありますが、おおむね高いです。とりわけ高いのは、例えば、「Q13 国際性・異文化理解力」で、京大平均で「十分」と答えた会社が 24.9%に対して、人環修了生は 38.1%、総人卒業生は 33.3%です。項目によって飛び抜けて高くなっているところがいくつかあって、総合人間学部の卒業生や人間・環境学研究科の修了生の特色を表していると思います。ただ先ほど言ったように、割と転職していくタイプや一匹狼タイプの人たちが多いので、必ずしも会社に評価されているわけではないですが、個別の能力で見ると比較的良く見てもらっているということが、全体としては出ているかなと思います。

#### 宮下研究科長：

ありがとうございます。他に補足はありますか。

#### 佐野宏学部教務委員長：

悩むということについて、これは構造的な問題が少しあるので申し上げますと、京都大学は「自由の学風」というのをモットーとしている。「自由な」という意味ではなくて、「自由の」となっている。「自ら取り組む」の意味ですが、主体性を最大限にとっているというのが一番の特徴だと思います。今まで受験勉強でルールに敷かれてきた学生からすると、突然、「自由にあなたが好きに選びなさい」という意味で、しかも総合人間学部は他部局と比べて文理融合など広範囲の選択肢から選ぶことになるので、迷うのですね。

結局、その主体性を最大限にすると、それが苦悩になってしまって、「迷う」あるいは「悩む」。「みんなが決めていくのに自分は決まらない」ということになるのと、留年してしまったり、留年すると悩んでしまったりということが起こる。全体の履修ガイドはあるのです。かといってガイドをつけると、学生の主体性を奪ってしまう。あまり学生の主体性は奪いたくない。ここがちょっと悩ましいところで、自由を標榜する以上は、めいっぱい自分たちで選択して頑張ってもらいたい。今までだったらこれでバリバリやっていく人たちが多かったのですが、さきほどお話があったよ

うにコミュニティが分断されていくと、結局ネット社会ですから、他の人から見えなくなってしまいうので、だんだん悩みが多くなってきてしまうというのは事実だと思います。

でもその分、教員アドバイザー等、教員の方から寄り添って行って、修学状況が芳しくない学生を早めに見つけて、電話をかけるなり、親御さんに相談するなりということをして、かなりケアを綿密にやっています。その効果もあって改善しつつあるのですけれども、とにかく学生相談室に行く学生が増えてきているという現状です。これはもう少し経過を見なきゃいけないということがあります。

「研究を他者に語る」の効果についてですが、まだ始まったところで非常に難しいんですが、ただ学生に対して指導するプロセスで、演習の中で話をする時に、私は特に日本語学の専門でございますので、注意して（私が行っていることとして）比較的効果があったところを申し上げます。およそ「伝える力は聞く力と変わらないので、どう聞くかという聞き方が大事で、聞き方の能力があれば伝える能力が上がっていくものだから、伝えなければ一生懸命に聞け」という話を言っています。私も全学共通科目の授業の中で、学生から笑われるんですけど、「私の話は楽しそうに聞け」と言って授業をする。「どんなにつまらなくても楽しそうに聞け」と言って授業をするんですが、これは冗談ではなくて、聞く能力を上げることで彼らが話す能力も上がっていくものだと思いますので、その辺り（聞き方）を指導しているところです。成果がどの程度上がっているかわかりませんが、授業の中で演習などでは「良くなっているな」「だんだん上がっているな」という印象がございます。

#### **神崎大学院教務委員長：**

先ほど教員アドバイザーというのが出てきました。大学院では指導教員と副指導教員は修士の学位論文を評価するという意味でありますが、アドバイザーの教員というのも学生に選ばせています。このアドバイザーを選ぶときには、できるだけ分野の違う先生に、ということをおりまして、学問的にちょっと悩む、指導教員にすごく厳しく言われたとかということは、なかなか副指導教員の先生に言いにくいところがあると思うので、それをアドバイザーの先生に相談するということをしております。一定の効果はあると思っており、大学院のアンケートや修了後のアンケートでも、アドバイザーの先生に相談して、指導教員に関して学生相談室に繋げてもらえたとい意見もあります。そういう意味でアドバイザーがすごくいい役割を担っているんじゃないかなと僕は思っております。

「研究を他者に語る」「他者と語る」につきましては、これは必修ですので教員がその場にいなといけないんですが、教員が監視するというよりも、むしろ私たちが楽しみにしています。教員というよりも、一学生として質問して、教員が質問しまくってしまったということもあるぐらい楽しんでます。総合人間学部、人間・環境学研究科が、学生と教員の距離が近いということが、そういった学生と議論を楽しむという場になっているのかなと思っております。効果はこれから検証していくとありますけれども、間違いなくいい効果を得られるというふうに私は思っております。以上です。

**近藤真委員長：**

ありがとうございました。それでは Zoom でご参加の里見委員いかがでしょうか。

**里見委員：**

ありがとうございます。ご説明を伺いまして、もともと特色のある 10 の講座をお持ちの上に、不断の見直しをされているということに対して、改めて敬意を表すべきだと思いました。それから学術越境というキーワードも、学生に対してスッと入ってくる用語を選ばれていると思ひまして、この点も非常に印象に残りました。また、自学自習の京都大学にあって、非常に手厚い仕組みを持っていらっしゃるなという感想を持ったのですけれども、自由に学べる環境に対して、どうサポートするかということで作り込まれたのだということ、今お話を伺って理解いたしました。

質問としては、今日ご説明が特になかったからなのですが、授業アンケートを読ませていただきまして、非常に面白い結果が出ていると感じたところがございます。まず一つは、自分たち学生のアンケートの声を受けて改善されているだろうかという質問に対して、学部のほうは、自分たちに対して教育が必ずしも良くなったという評価はされていなくて、修士では比較的良くなっているという評価になっているのですね。授業というのは、カリキュラムを作り上げた後で、実際に教員の方々がどうそれをこなして授業に反映させているかによって、学生に対する授業アンケートで結果が出てくるということだと思います。そこで、まさに FD といいますか、先生方にカリキュラムの理念を浸透させ、先生方の授業を良くしていくための取り組みとしてどのようなことをされているのか、授業アンケートをどう使っているのかということが質問の一つ目でございます。

もう一つは、修士の定員割れについてお話があったのですけれども、学部で応募者が定員の 4 倍ぐらいになっていらっしゃるのと比べると、修士は確かにそこまでではないですが、受験者は定員以上の応募があるにもかかわらず絞り込んでおられるという様子が見られます。例えば先ほど修士・博士の議論の中で社会人向けの枠を設けられたり、あるいは編入学の枠を設けられたりということで工夫されているというお話もありましたけれども、今後どういう工夫でこの定員について取り扱っていきたいと考えておられるのか、その 2 点を伺えればと思ひました。ありがとうございます。

**宮下研究科長：**

それでは、まず、いわゆる授業改善における FD 活動をどう部局として取り組んでいるかということについて、まずは私の方からお答えさせていただきます。

授業改善に関しては、やはり個々の先生方の授業内容に介入するのは難しいというのが現状として正直あります。ですので、学生の評価アンケートを教授会で共有して、アンケート結果をみんなで見えることをやっています。「学生からはいろいろこんな意見がありますよ」ということを共

有して、それぞれの教員に「皆さん省みてください」ということと、自分を評価してみるということと、また授業評価アンケート結果はそれぞれの先生方がちゃんと見られるようになっていきますので、それぞれご確認いただいて次の年度の授業に役立ててほしいということをお願いしています。やはり個々に介入するのは難しいところがあるのかなと思っています。

大学院の方がアンケート結果が少し良くなるのは、おそらく大学院の授業の場合、かなり専門に近い興味の学生が集まってきているからかと思います。学部は文系もいれば理系もいるという状況の中で全員に満足させるということはやはり難しい部分が出てくるんですが、大学院はどちらかというと専門の興味が近い学生が集まってくるので、先生がやっておられる内容と近いところが出てきて、評価が少し上がっているのかなと考えています。

あと、僕はちょっと違った授業をやっています。シラバスはシラバスで作るんですが、実際は最初の授業の時に、僕の専門はこういう専門であると説明した後に、その専門の中で「あなたが聞きたいことは何なんだ」ということをすべての受講希望者にヒアリングして、その上でシラバスを作り直すということをしています。僕は藻類学やってるんですが、ある学生がブルーカーボンという議論について知りたいということと、じゃあこれを外してブルーカーボンの講義を入れます。その授業を僕が準備するのは大変なんですけど、そういう工夫ができる自由度を持っているというのも、大学院授業の一つの特徴なのかなと個人的には思っています。

#### 佐野亘自己点検・評価委員長：

修士の定員割れのことだけ少しお伝えすると、今は京大全体でできるだけ若手の教員を増やそうという方針で動いています。いわゆる理系学部であると、多くの場合講座制をとっていて、教授の先生がいて、その下に准教授の先生がおられて、その下に講師や助教の先生がおられる。それである種年齢バランスが整っているわけですが、人間・環境学研究科というのは講座とは言いつつ、一人一人がそれぞれ別々に研究室を持っている形になっていて、多くの場合教授のもとに准教授がいるというふうにはなっていません。そうすると何が起ころかということ、全ての分野につき一つずつの研究室があるということなので、普通に人事をやると年配の業績のある人ばかり採用されてしまいます。でも、すでに業績を積んだ教授ばかりになると教員組織が高年齢化してしまうということがあり、最近は准教授限定の人事をするという形で、少し若返りを図っています。最近は、団塊の世代の先生方で、全国的にも知名度が高い有名な先生方が定年退職されている時期です。その後任として、まだ業績はそれほどないんだけど、これからきっと業績を積んでくれるだろうという若い先生を准教授として採用しているところです。

ただ、そういう若手の准教授でまだやっとな芽が出てきたところの先生には、やはり受験生が集まりにくいです。そういう先生が例えば本を出したり、業績を積んで学会でも有名になると、おそらく受験生が増えてくるんですが、講座によって、昔の偉い先生が抜けて、その後若い先生が来たけど、まだそれほど全国的に知られているわけではないという先生方が多い講座や分野もあって、そういうところではなかなか院生が集まらず、今はちょうど過渡期かなというのが私の持っている一つの印象です。私からは以上です。

**宮下研究科長：**

今、佐野評価委員長がお話ししてくださったところに、もう一つ付け加えますと、団塊の世代の先生方が人数的に多いのですが、その方々は定年前 2 年間は学生を取れない状態になります。1 割か 1 割ちょっとの先生方が次々と抜けられるときになると、先生方が平均的に学生を取れるようにという現状の仕組みでは、どうしても取れる上限が決まってしまう。そうではなく、たくさんお引き受けできる先生がおられたら、その先生にお引き受けいただくような仕組みをしっかりと作っていく必要があるかと今は考えているところです。以上です。

**近藤真委員長：**

里見委員よろしいでしょうか。

**里見委員：**

非常によくわかりました。お悩みは深いということも理解いたしました。ぜひ取り組みが成功されることを期待しております。

**近藤真委員長：**

ありがとうございました。それでは私からいくつか質問をさせていただきたいと思います。ちょっと細かいことが気になるタチなので、細かい質問もさせていただきますが、別にあら探しをしようというわけでは。褒める機会は後でいくらでもあると思うので。

まず、総合人間学部の卒業生の進路の表を拝見したときに、進学率と就職率を足すと大体 9 割ぐらいのところになっていて、残り 10%がいわゆる「その他」ということなんだろうと理解しております。もしかしたらこちらの資料を読み込めばわかるのかもしれないですが、この「その他」のうちに、不明の方というのはどれぐらいなんでしょうか。私どもの大学はいつもそこを気にするんですね。後が追えてない学生がどれぐらいいるかっていうところを。もしおわかりでしたら、大体の感覚の数字でも結構なんですけれども。未提出、進路がこちらで把握できていない学生っていうのがどれぐらい、この 10%のうちのどれぐらいいらっしゃるのか。

**宮下研究科長：**

10%は書類を出してこない学生っていうことになってますよね。なので、残念ながら僕らはそれをフォローできてないというのは正直なところですよ。

**近藤真委員長：**

10%が出してこなかったと。

**宮下研究科長：**

はい。

**近藤真委員長：**

どうもありがとうございます。あと教育面での特色というところで、主専攻副専攻は自由に選べるという形が使われたんですが、専攻ごとの人数制限みたいなものはしてらっしゃるのでしょうか。それとも本当に、実際には起こり得ないんですけど、みんなが一つの専攻を主専攻にしたという希望が出たりした時には、どういうふうになるのでしょうか。

**宮下研究科長：**

我々のところはほぼそれぞれの先生が「一国一城の主」となっているので、これまでやはり、たくさん学部生が志望する先生がいるなど、偏りが生じる場合がありました。今は、一人の先生が指導する学部生の上限を3名とするルールを作って、3名以上を受け入れる場合はそれなりの理由を明確に述べてもらうというルールにして、できるだけ一人の先生に学生が固まらないような仕組みをとっています。そういうルールを作ると、学生もいろいろなことを考えて研究室選び、あるいは専攻選びをしていくことになります。最終的に学生が指導教員を決めた時点で、学生はその講座に所属するということになりますので。もともとこの講座に入るつもりで一先懸命勉強してきたけど、この先生に受け入れてもらえないんだったら、別の講座のこの先生のところへ行きたい、それも可にしています。

**近藤真委員長：**

「研究を他者に語る」「他者と語る」について、大学院の「他者と語る」は150分1グループでということだったんですが、学部の「他者に語る」でも同じようなスタイルで、それを毎週サイクルとして回していくということでしょうか？

**佐野宏学部教務委員長：**

回数としましては、去年までは2月に開催する1回だけだったのですが、今年から9月も開催し、学生は9月か2月のどちらかを選んで発表します。2月はリモートでやります。質疑応答を入れて30分という持ち時間がありますので、大体ひとり20分くらい説明して、残り10分くらいは質疑応答。これを3人くらいワンセットにしまして90分で、3人の発表者に対して、3人もしくは4人、自由に入ってくるオーディエンスも入れて、7、8人から10人くらいの前で発表するということになります。

具体的に議論したりというのは、教員がいますと教員と話をしたり、一緒に発表する3人をもって議論をしたりということになりますが、その30分の間は、教員3人と学生3人の間でもって議論をします。それを周りがギャラリーとして見えています。司会担当者が質問ありませんかと言うと、そのギャラリーの中の1年生から2年生あたりが挙手して質問を投げ返すということもあります。このように教員と学生が関係して、ここで議論をして話をするということをしております。ただ、それ1回だけでして、毎週やっているというわけではないです。

**近藤真委員長：**

年2回あるうち、1回どっちかでやればいいということですね。学生さんが発表をして。

最後になるんですが、博士課程の教養教育実習で、講評を受けるというのは指導教員かその授業を担当されている先生から講評を受けるということでしょうか。特にその回の授業に出てきた学部の学生さんたちからリアクションをもらうとかフィードバックをもらうということは制度としてやられているのでしょうか。

#### **宮下研究科長：**

あります。まず、授業をするには、まず先生と話し合っ、その先生がやっている授業のどこの部門を担当するかという議論から始まって、「では学習資料を作ってください」というコミュニケーションがあって、事前に一度予行演習をしてもらって、「このスライドをこうすべきじゃないか」、あるいは「こういう資料を提出すべきじゃないか」ということを全て指導教員と議論して、実際に授業をします。実際やった後にももちろん指導教員がこれはこうすべきだったんじゃないかという指導と、学生アンケートを取ることでなっています。それらに基づいてもう一度指導教員と議論して、こんな工夫が必要だったねということ振り返るということをして15コマ分くらいのスケジュールでやっています。

#### **近藤真委員長：**

はい、ありがとうございます。よくわかりました。

一人ずつお伺いしましたが、他に何かご意見とかご質問ございますでしょうか。あるいは研究科から補足とか追加でございせんか。

#### **佐野亘自己点検・評価委員長：**

一つだけ今日はあまり触れられなかった点で。一つは国際交流で、総合人間学部の学生さんの一つの特徴は、交換留学に行くことが多いということです。私は法学部出身で、昔だったからかもしれないですが、大学院生で留学する人はもちろんおりましたが、学部生で留学する人はあまりいませんでした。今、京大では提携先の大学と交換留学するという仕組みを取っているんですが、総合人間学部の学生はよく交換留学に行きます。交換留学なので休学する必要がないので4年間で卒業できます。ただ、例えば卒論があったり就活があったりして、現実には1年留年する学生も多くて、そういう意味で交換留学の結果、留年生が増えているという点が少しあります。その分、世界各国、いわゆるイギリスに行きますとかアメリカに行きますみたいなわかりやすいものだけではなく、スウェーデンに行きますとかイスラエルに行きますとかシンガポールに行きますみたいな学生もいて、それも多様でとても総合人間学部らしいなと思っています。

それからもう一つは、総合人間学部の学生もそうですし、人間・環境学研究科の院生もそうなんですが、他学部、他研究科の授業をとってその単位を卒業単位に入れることができます。これも当研究科の特色で、もちろん上限は決まっているんですが、例えば経済学を勉強したいとして、総合人間学部で提供されている経済学の授業があるけれども、もうちょっと違った内容の経済学を勉強したいというときは、経済学部の授業を取りに行っ、それを自分の卒業要件の単位に入

れるということも、指導教員が認めればできるという仕組みになっています。大学院でも同様の仕組みがあります。どうしても総合人間学部とか人間・環境学研究科というのは、一つの分野の先生が少ない。生物の先生は3人とか、政治学の先生は2人か3人みたいなことなんですが、その分他学部とか他研究科に行って、いろんな授業を受ける形でそこを補うという仕組みもあって、それがちゃんと正式な修了単位、卒業単位にもカウントできるような仕組みが作られている、ということです。

**宮下研究科長：**

留学先で取った単位も、指導教員が評価した上で、教務委員会でシラバスの内容と受講時間と単位の認定をもって、こちらの専門単位として認める仕組みを作ることによって、留学のハードルを下げるという取り組みもしています。半年なり1年なり留学して授業をしっかり受けてくると、空白部分を若干埋められる仕組みになっています。

**近藤真委員長：**

ありがとうございました。それでは、予定した時間を超過してしまっていますけれども、一旦ここで休憩ということで。まず午前の部お疲れさまでした。ありがとうございました。

**《午後の部》 14:30～16:00**

昼食を兼ねての意見交換及び学術越境センターを会場とした学部生・大学院生との懇談の後、105会議室に戻り、資料に基づき、齋木副研究科長・附属学術越境センター長から「**学術越境センターの取り組み**」(資料7-(8)-④)、宮下研究科長から「**大学院人間・環境学研究科の研究面での取り組み**」(資料7-(8)-⑤)について説明があった後、下記のとおり各外部評価委員から意見が述べられるとともに質疑応答が行われた。

**【意見・質疑応答】**

**近藤真委員長：**

ご説明ありがとうございました。2件のご説明をいただきましたけれども、午後の部について、まず各委員からご意見ご質問をお願いしたいと思います。では、午後の部は里見委員からお願いしてよろしいでしょうか。

**里見委員：**

ありがとうございます。非常に特徴的と言いますか、他学部にはおそらないだろうと思うような取り組みをたくさんされているということがよくわかりまして、まずそこに非常に感銘を受けております。特に学術越境センターで、先ほど学生さんとお話をさせていただいたところ、この「学術越境プログラム」のPhase1、Phase2、あるいは「フィールドエンカウンター」に参加されている学生さんが、自分たちの研究の幅が広がるということの評価されていたので、有効

に働いているのではないかと感じたところでございます。それから学生さんが、学部の段階から研究発表することを奨励されていることが非常に印象的でありまして、京大の他学部の学生さんだと、単位を取って卒業するということにきゅうきゅうとするようなのを見ていましたので、その中で独立独歩というか、自分が、個が確立しているというか、ユニークであるからこそ、学会発表で筆頭著者になれるということもあるのだと思いますので、そういったところが非常に特徴としてよく出ているという感じを受けました。その中で学生さんとお話しした結果、後ほどまた皆さんも聞かれるのだと思いますけれど、意思がはっきりして分野が明確な学生さんにとってみると、非常に幅の広いことが有効に働いていることがわかったのですが、逆に追究したいことを見失ってしまった場合、大海に溺れるようなことになるのだらうというのもよくわかって、そのあたりのバランスが非常に難しいのだらうという感じを持ちましたので、もし何か感想などありましたらいただけるとありがたいと思います。以上です。

#### 宮下研究科長：

ご意見ありがとうございます。まさしくそこが、我々が取り組んでいかなければいけない一つの課題であると認識しています。そのために学部では、1回生については担任を置き、2回生以降については教員アドバイザーを設けているんですが、現実的にはアドバイザーがうまく機能していない部分と機能している部分両方あるので、アドバイザーをどのように機能させるべきかということは今後検討することになっています。

また、組織再編のときに、先生がアドバイスするよりも学生同士のコミュニケーションを深くした方がいいんじゃないかという議論もあって、どうやって学生同士をつなげるかということも考えなければいけないということもあり、交流促進委員会というものを作っています。これは先生と学生の交流という意味もあるんですが、学生同士の交流の機会もできるだけ増やしたいという意図もあります。交流会を通して、「先輩はこういう時はどうしました？」とか、そういうコミュニケーションができればいいなと思っています。今いろいろなことを考えている途中であって、その一つの取り組みがアドバイザーをどうやって実質化していくかということと、縦の交流をどうやって深めていくかということです。午前中にもありましたが、どうしても横の交流も薄いため、学生が孤立してしまう可能性もあります。横の交流をどうやって深めていくかということに関しては、新しい取り組みとして、入学後に学生証を取りに来る日に、この日はみんなが集まれる一つの機会なので、学生証を受けとったらすぐ「さよなら」ではなく、取りに来た後にみんな集まって、そこでまず LINE アドレスの交換会ができる新入生同士の交流の機会をつくっています。実はそれは功を奏していて、全員同じ部屋に入ると、さすがに交流し始めます。あるいは、新入生合宿というものを先輩学生が企画してやってくださっていて、みんなで一泊して、教員と学生の交流会や学生同士の交流会でコミュニケーションを図ってもらうというような努力をしています。

横のつながり、縦のつながりを作りながら、大海に溺れてしまう学生をどうやって救い出していくかという努力はしています。学部教務委員会では、単位取得率が少ない学生に対してアドバイザーからコンタクトを取るという仕組みを作って、「どうしたの？なんで単位取得率が少ないの？」と声をかけるようにしています。僕も一人担当している学生がいるんですが、その学生は

学業以外のことに非常に興味を持っているということがわかりました。探検部の学生で、今は探検がしたいんだということでした。僕はそれはそれでいいと思いました。「でもちゃんと卒業はしてね」とアドバイスしました。学生の状況がわかれば対応ができます。じゃあそれで全員救えるか？溺れた学生を全員救えるか？これは残念ながらノーなんですけど、いろいろな取り組みをさらに考えているところではあります。以上です。

**里見委員：**

ありがとうございました。

**近藤真委員長：**

ありがとうございます。それでは近藤委員。

**近藤和行委員：**

ありがとうございます。今のご説明に関しての質問でいいですか？2つ教えてください。1つは現在の「学術越境プログラム」に対する基本的な考え方というか、温度感になると思うんですが、最後の説明でおっしゃったように、なかなか自分の専門だけで精一杯なのに学術越境研究なんかやってくれんよという声も一方である中で、基本的な姿勢としては、学術を越境した知を融合することは、これからの産業とかいろいろなことを含めて、是非必要だよねという側の温度感なのか、それともそっちのほうがベターだから、できればそれを進めようということ、あくまで現段階では学生がそちらに向かうサポート的なことなのか。牽引する方なのか、サポート的なことなのか。温度感でいうとどんな感じになってるんですか。

**齋木副研究科長：**

僕はどっちかという後ろから押すという形と考えています。僕自身の個人的な見解ですが。もちろん産業界で考えるときに、そういうことをできるだけたくさん要請するというのは求められていることです。とはいえ現実でいうと、みんながみんなそれができるかという、そうでもない。人環に来てる学生でも、積極的にそうしたくないという学生もやっぱりいるわけです。自分の専門分野の先生について、その分野を極めたい、脇目もふらずそれを学位を取るまでにやりたいという学生がやっぱりいて、そういう学生に強制的に他所に行けというのは、さすがにちょっと無理があるということがあります。とはいえ、カリキュラムとしては、午前中に話があった「研究を他者と語る」の中で、そのような学生さんでも、例えば修士の2年間の間に、1回ぐらい全然違うところの講座の学生と自分の研究を伝え合うような経験はしてほしい。その経験をすることが、自分のやっていることがどのくらい伝わるのかとか、あるいは伝わらないのか、どうしたら伝わるのか、それを実際に体験するということなので、うまくいくにしてもいいかなくても、学生にとっては意味があるとは思っている。なのでそれを必修として全員にやってもらうという形にしているんですが、ただ「学術越境プログラム」のように、かなり本格的にするところに関しては、今のところはそれをしたいという意欲を持っている学生さんに限定し、そういう人に対してはできるだけサポートしていきますというスタンスで今のところは動いています。お

答えになっていますか。

**近藤和行委員：**

「他者と語る」は午前中も議論があったんですが、非常に大切なことで、同じ共通言語で議論ができないといけない。特定の分野で専門家同士で話しているのはいいかもしれないけど、そういう場面じゃない方が世の中には多いので、マストの話は多分必要なんだろうと思います。

**齋木副研究科長：**

うまく伝わらないということを体験してもらうということを目指しているのですが、おそらくやっている学生は、結局自分の研究は伝わらなかったと思っている学生が多いと思うんです。それはその後いろんな方に、例えばそれを積極的に伝えていこうということに学生もなるかと思うし、全くそういう環境がない、同じディシプリンの中で話が伝わる場所だけでずっといくというのではないのを考えてああいうプログラムを今やっている。

**近藤和行委員：**

肌感覚でいうと、越境して、いろんなところにやっていってみたいと思う学生というのは何割ぐらいの感じですか。

**齋木副研究科長：**

1割。

**近藤和行委員：**

1割ですか。

**齋木副研究科長：**

実際に「学術越境プログラム」を授業としてやっているところに来る学生は大体修士の全体の1割ぐらい。これまで3年間の実績ですが。だから積極的にそういうことをやってみたいと考える学生は僕の感じでは全体の1割。

**近藤和行委員：**

ありがとうございます。もう一つ、実務的な話でよろしいですか。宮下先生の資料の2ページ目の外部資金の獲得状況ですが、外部資金の話は長い間話題になっていて、いろいろ大変ご苦労なさっているとお聞きしています。この表の外部資金の獲得状況には、企業との共同研究費がありますか？

**宮下研究科長：**

入っていますが、共同研究費は意外と少ないです。

**近藤和行委員：**

そうなんですか。それはここの人環・総人の特徴なんですか。それとも全体的な特徴ですか。

**宮下研究科長：**

おそらく、工学などの共同研究というのは民間企業が入ってくるケースが多いので額が大きくなると思うんですが、人環の共同研究というのは、場合によっては0円共同研究みたいなものもあるんですね。お金を産むかどうかわからない共同研究に、お金を払えないということだと思えます。とりあえず0円でスタートしましょうみたいな共同研究もあるし、あんまり高額な共同研究は我々のところではないんです。大きなお金を取っている人たちはみんな国とかそのレベルで研究資金を獲得してきています。企業との個別共同研究というのはそれほど多くありません。僕も企業との共同研究を2件くらいやっていますが、科研費などに比べて額は小さくなく、100万円、200万円程度のものが多いです。全体で比べてしまうと共同研究費の割合というのは少なくなっている部局かもしれません。他の部局と比較していないのでわかりませんが。

**近藤和行委員：**

この中ではほぼほぼ表れていないという感じですね。どこかの項目によるとか、さっき言った受託研究費の間接経費というのが、0円研究だと人だけ出しましょうというのがこれが計上されているとか、そういうものでもないんですか。

**宮下研究科長：**

基本そうですね。

**近藤和行委員：**

ありがとうございます。

**近藤真委員長：**

それでは私の方から質問をさせていただきます。学術越境センターの取り組みについては、さっき何人もの学生が話してくれて、魅力的な取り組みをされているかなというふうに拝見しています。一点ちょっとお伺いしたいのは、これは学生さんたちが学術越境をしていくことを後押ししてやる取り組みというふうに拝見するんですが、教員が教員同士で学術越境をするための仕掛けのようなものというのは何かお持ちになんだろうかというのが質問です。

**齋木副研究科長：**

それは当初やっぴやっぴして、「学術越境プロジェクト」というのが書いてあるんですが、正直に申し上げると、なかなか教員同士はうまくいっていない。理由はかなり明確で、総人・人環の教員は正直忙しすぎて、何か新しいプロジェクトを始めようと言ってもほとんど時間がなくて、動かないというところがあります。当初はいくつかプロジェクトを立てて動き出したんですが、結局なかなか本格的に教員同士が動き出しているという形にはいかないというところがありました。

もともとはそれをテコにして教員同士がプロジェクトを作って、そこに学生が入っていくことで学術越境をエンカレッジしようというのを皮算用で始めたんですが、なかなか教員同士のプロジェクトが立ち上がってこないというのと、もう一つは教員同士が仮に本格的なプロジェクトを立ててしまっても、本格的過ぎて敷居が高いということで学生が入っていけないということになって、どちらも動かなくなったのが「フィールドエンカウンター」というフィールド体験のプログラムを始めたもともとのきっかけです。長くコミットはしないんだけど、ちょっと覗いてみるというプログラムを作ろうということになりました。当初センターを立ち上げるときにも教員同士をもちろん想定はしていたんですが、なかなか現状では機能しづらい。もう少し教員の時間の余裕ができると、おそらくいろんなポテンシャルがある。教員同士が色々話し合う機会、それこそ懇親会などで立ち話をすると、「こんなことやったら面白そうだよ」という話がたくさん出てくるんですが、本当に腰を据えてやろうとなると、やっぱり忙し過ぎてできない。なかなかリリーフできないというのが現状です。

#### 近藤真委員長：

教員の多忙化というのは私も身に沁みています。

お手本になるとは思いませんが、私たちの部局でやっている取り組みを紹介させていただくと、2つほど仕掛けを作っていて、1つは部局の中に情報学研究推進室という場所を作っていて、そこで複数教員による共同プロジェクトの支援をやっています。今、学科としては3つあって、いわゆる工学系の情報科学科と、人文社会系の情報社会学科と、ある意味その真ん中の行動情報学科の3つの学科があるんですが、できるだけ複数の学科の教員が絡むプロジェクトを優先しますと謳っていて、極力畑の遠い人同士と一緒にやってねということをやっています。もう一つは、カリキュラムを絡めて学部の2年生と3年生、前期、後期、前期、後期の4期を通して先端情報学実習の1、2、3、4を開講しています。選択科目なんですけど、意図としては尖った学生をさらに尖らそうと。一緒にする必要はない、やりたい学生に2年生のうちから研究に触れさせてやろう。ただしその時に彼ら彼女らが触れる研究プロジェクトを、これまた複数の学科の教員が指導する形でプロジェクトを立案して、この授業を取ったらこういうプロジェクトが選択できるよ、選択対象になるよということを最初は教員の方がプレゼンするんです。それで履修希望の学生がポスター発表を見て、「このプロジェクトで行きたい」。それはどの学科の学生も受けてよく、どの学科の学生も学科の縛りなくプロジェクトに参加できます。もう一つインセンティブとしては、先端情報学実習の受講者に関しては、全員ではないですが、一部卒研の優先配属があります。そういう意味で教員サイドからしても、低学年のうちから自分の研究に興味を持ってやってくれていて、指導しながらよく知っている学生で、自分の研究室に行きたいという学生を、優先的に引き上げられるある種のインセンティブにはなっていたりします。後半の取り組みは試みとしては珍しいかもしれないなと思ってご紹介させていただきました。

研究科長のご説明いただいた資料の、一つ目は単純な確認ですけども、この科研費の受入れ状況は、代表者の件数あるいは採択率だけですかね。多分こういうところで分担のものはあんまり参入しないように気がするんですが。

**宮下研究科長：**

すみません、そこはちゃんと確認できていません。

**近藤真委員長：**

はい、わかりました。

もう一つ、地域連携に関して、出張講義、訪問受入、あるいは兼業や共同研究をご紹介いただきました。お伺いしたいのは、例えばカリキュラムの中、授業科目や課外活動などで、オフィシャルにあるいはセミオフィシャルにやられているような地域連携プロジェクトみたいなものはあるのでしょうか。

**宮下研究科長：**

この人間・環境学研究科が立ち上がった時には、いくつかの地方自治体とのプロジェクトがいくつかあったんですが、今は残念ながらないですね。もうずっと前に終わってますし、今はないです。

**近藤真委員長：**

わかりました。もしあればと思ってお伺いしただけです。私からは以上になります。

他にご意見、ご質問いかがでしょうか。午後の部に限らず、午前部の部から全体を通してのご意見、ご質問ということでも結構ですけれども、いかがでしょうか。

**里見委員：**

就職支援というのはどのぐらい学部と修士・博士でされているのかということをお伺いできればと思いました。だいぶ多分野にわたっていますし、共同研究などが少ないとすれば、どのような仕組みで就職支援していくのかというのは難しいだろうと思いましたので、教えてください。

**宮下研究科長：**

私の認識では、学部に関しては、就職した卒業生や就職が決まった学部4回生がどのような就職活動をしたかということをお話していただく機会を毎年作っています。それによって就活しているのはこういうものなんだな、始める時期っていうのはこんなもんだなという認識をしてもらっています。しかし、就活の仕組みがどんどん変わってきて、逆に言うと今はまずインターンに行つてという話になっています。

例えば、我々は修士課程だったら1年生ぐらいの時はしっかり研究してねと思うんですが、学生は何を考えるかということ、まず夏のインターン先探しが始まります。インターン先探しに始まって、インターン先が決まると、「先生、今度はこの会社とこの会社のインターンに行きます」と言って研究ができない。そうこうしているうちに就活が本格的に始まってしまって、すぐに決まればいいんですが、なかなかすぐに決まらずにズルズル来て、春ごろにようやく「内定出ました」、

「あと半年で修士研究どうするのあんた」みたいな状況が起こりつつあるのが現状かなと思っています。

大学院に関しては恐らく京都大学の歴史的には、工学部とかいわゆる実学研究科は多分それなりの就職先とかがあると思うんですが、我々のところも結構いろんな募集は来てるんですが、学生は結構自分でどんどん選んでいくということが多いのかなと思っていますし、大学院に関しては特別なサポートはしていないんじゃないかと思えますけどいかがでしょうか。

#### **齋木副研究科長：**

一応制度的には就職担当教員というのは決めてまして、その教員が就職の情報や学校推薦の紹介などを一応やっていますが、多分規模的には工学系とか情報学とかに比べれば非常に小さくて、学校推薦を通して就職するという学生はそもそも数が少ない。研究科長がおっしゃったように、基本的には自分で探してきて、自分でインターンに行って就職するという。それがほとんどです。

#### **宮下研究科長：**

感覚的に言うと、僕もバブル世代だったんですが、バブル世代の時は何か大きな安定企業がいみたいなイメージがあったと思うんですが、今は私がよく知らない会社に「決まりました」と言ってくる学生が結構多くて、学生が独自の視点で選んでくれることが結構あって、僕も「それ何してる会社？」みたいなことを逆に聞く機会が多いと感じています。一般的な、例えば公務員や教員になるとか、そういうことよりもちょっと違うところをみんな探してきてるのかなという感覚を最近は持っています。「3年くらいこの会社に勤めて、あとは何かちょっと違うこともやってみたいなと思ってるんです」っていう学生も出てくるので、就職観というのが我々の時代と違うかなと思っています。齋木副研究科長からもありました、就職担当教員は一応置いてますが、書類を作らなければいけない時にハンコを押したり書類を書いたりという程度かなと僕は認識しています。なので、やっぱり基本的には大学院生に関しては自分で探してきていることが多いんじゃないかと思えます。

#### **齋木副研究科長：**

個人的な印象を少しお話すると、就職に関しては、私の理解は総合人間学部も人間・環境学研究科もコンサルが多い。それは改組の時に資料を調べたこともあって、そうすると実績というのはすごくコンサルが多い。文系・理系にかかわらず。私の学生も結構います。私のところは実験心理学の研究室なんですが、なぜか就職している学生はほぼコンサルに行ったりするので、とてもコンサルに就職する学生が学部生、修士でとても多い。

#### **佐野亘自己点検・評価委員長：**

コンサルは確かに今でも多いんですが、今傾向がやや変わりつつあって、「コンサルダメなんじゃないね？」というふうに変わりつつあります。「結局AIで良くない？」みたいになりつつあります。むしろ「コンサル危ないな」っていう。しかも、コンサルは内定が出るとインターンシップではなく、バイトの名目で卒業する前に仕事いっぱいやらせるんですが、それで参っちゃってコンサ

ル行くのは止めたっていう学生もいて。一時期は特に優秀な学生ほどコンサル行ったんですが、一時期よりちょっと変わってきたという雰囲気です。

**齋木副研究科長：**

改組のために調べたのは5年くらい前です。

**佐野亘自己点検・評価委員長：**

その時に比べるとやや変わってる感じはあります。

**近藤和行委員：**

では、質問というより感想も含めて、お話をさせていただきます。

1995年に日経連が出した有名なレポートがあって、「新時代の日本的経営」でしたか、21世紀の労働者の形態を3つに分類したもので、その第一分類は基幹的従業員とあって、要するにラインで働く幹部社員、終身雇用の流れをそのままいって、最後はマネジメントしながら高給を得る。次の階層が、短期の契約1年や3年ごとで働く専門者集団で、短期間だけどそれなりの高給を得られる。一番下の階層は悪い言葉で言うとスキルの乏しい方々で、その時々で短期の、昔の自動車工場の期間工みたいな感じで、そういう人たちは景気の調整弁にされて、景気の良い時はいいけどそうでない時は「はいさよなら」となる。その三層に分かれるだろうと。95年に公表されていて、その時は終身雇用とか年功賃金が日本社会に残っていた時だから「そんなことになるわけないだろう」ってみんな話してたのだけど、30年経ってやはり概ねそのとおりになっている感はある。さきほど話に出たコンサルなどいろいろなところを転々とする人は、おそらくその真ん中の層の高給を得ながら短期間で行く人たち。

なぜその話をするかという、京都大学の学生の皆さん、卒業した後に研究職として残られる方はいますが、多くは社会に出て企業なり団体に入られるわけですよね。その中でその真ん中の層として専門知識を活かしてやれるという人はもちろんいいし、それはそれでたくさん輩出してもらった方がいいと思う。産業界的な目で見ると一番欲しいのは一番上の層で、そこはどのような人たちかという、専門知識を活かして専門家をマネジメントできる、そういう人たちが多分一番求められている。こういうレベルの高い大学にはそもそも求められるところなんだろうなというような気がします。

そういう意味で、教養科目をもともと幅広く取るとか、「他者に語る」「他者と語る」という、同じ共通言語でわかりやすく言い合えるという、そういうものはますます今後必要になってくるから、まさしく時代の方向を向いた教育をされているんだろうなというふうに私は今日聞いていて感じました。一番いいのはコミュニケーションができる専門家なんですが、一番最悪なのはコミュニケーションができない専門家なんですよね。それが一番厄介だということがあって。そういうことにならないようにこういうプログラムを組んでやってらっしゃるところはすごくいいなと思って、今後もウォッチさせてもらえたらというふうに思っています。感想です。

**近藤真委員長：**

それでは最後に私の方から全体を通してというよりも、私が個人的にこの委員を引き受けたときからこれはお伺いしたいなと思っていることが一点と、もう一つは最後に感想みたいな話になります。

一つ目の質問は、私ども、先ほど3つの学科があるといいました。その情報科学科というのはいわゆるエンジニア系のインフォマティクスをやっているところなので、工学部の情報系の学科が前身になっていて、そこは高校生から見ても高校生の保護者から見ても何を勉強するところかというのはわかりやすいし、世の中に出ていくときにもいわゆるエンジニアとして就職していく。大学で何を学んでその後何になるのかというパスがわかりやすい。それに対して情報社会学科というのは、法律の人もいれば経済の人もいるし、私は言語学だし、メディア研究もいるし、人文・社会科学系のいろんな分野の人間が少人数ずつたくさん集まっている、ある種寄り合い所帯的なところで、もう学部ができて30年経つんですけども、この30年間ずっと苦労しているのが、結局、情報社会学科って何を学ぶところなんですかという問いに対する答えを私たちは提示しているつもりなんですけど、マーケットには納得していただけるような提示の仕方ができていないというところなんです。もし、似たようなお悩みをもしお持ちであったとしたら、その解消に何かされていることがあればお伺いしたい。どちらかというとなら私がヒントをもらいたくてお話しする次第なんです。「いやそんな悩みはうちにはありませんよ」とおっしゃるならそれで終わりなんですけど。

#### 宮下研究科長：

まず今先生がおっしゃられたことは、学生においてはとても大きな悩みみたいです。特に就職活動に行ったときに、「京都大学総合人間学部です」「は？」となる。いわゆる法学、理学、医学などの二文字学はみんなイメージできるわけですが、「総合人間学、なんですそれ」というところから話をしなければいけないということがまず大きな悩みである。じゃあ実際それを学生自身が表現できるかということ、おそらく表現できない。じゃあ教員全員が表現できるかということ、これも多分表現できない。そうすると今どうするか。

#### 佐野亘自己点検・評価委員長：

一般論としては先生がおっしゃったように伝えるのが難しいです。私が最初に教えたところが総合型の人間環境学部みたいところで、「環境」でも理系の先生は、生物やってますとか、生物多様性やってますとか、化学で水質の調査をやってますとか、とてもわかりやすいんですが、文系で環境やっているという、やはりなかなかわかってもらえないと思います。そういう時には、同じようなことされてると思うんですが、結局オープンキャンパスを頻繁に行いました。京大みたいなのは1年に1回しかしないんですけど、私立だったので大げさに言うと毎月やりました。毎月オープンキャンパスをやって、何回来てもいいので、いつも来る高校生とか、いつも来る親御さんとかもいる。そのうち高校の先生などから「理系の環境はわかるけど、文系で環境を勉強するってどういうことですか」と聞かれるんですよ。「例えばこんなことやってます」とか、そういう事例を具体的にフェイス・トゥー・フェイスで説明すると、「なるほどそういうことですか」と意外とわかってもらえるという感覚は持っています。

でも、社会一般に漠然と伝えるのは、とても難しいという気持ちを持っています。そうすると

いかにフェイス・トゥー・フェイスで個別に説明する場をたくさん作れるかです。総合人間学部は京大の中で最も一生懸命オープンキャンパスをやっている学部で、参加者の数も多いですし、先輩学生と相談したり、先生と相談したり、研究室訪問したり、先生の講演があったりなどたくさんやっているの、人間・環境学研究科とか総合人間学部について漠然と伝えるのではなく、具体的にこんなことやっていて、これは面白いでしょと伝える。理系の先生と文系の先生と一緒にやってるプロジェクトがあるんだよと教えてあげると、「なるほど」とか。「普通、こんな勉強は例えば工学部行ったらできないよとか、理学部行ったらできないけど、ここに来ると実はこういう経験できるよ」といった話を具体的にすると、ちょっとこっちを向いてくれる。

だから「情報」も、いわゆる工学部に行くと工学部の「情報」しかできない。文学部でも「情報」ができるけど、文学部だと文学部の研究分野の中でやることになる。でも、「情報」という言葉もあるしコンピューターもあるし、AIもあるし文化もあるし、いろいろなものの中で情報に取り組める可能性があって、「それって一緒にやらないとわからないよ」って具体的に教えてあげると、それなりに伝わることもある。それを個別に伝える労力をどれだけこちらが取るかみたいなことかと思えます。

#### **神崎大学院教務委員長：**

公開講座も頑張ってます、おそらく一番頑張っていたと思います。普通は、あるテーマに対して同じような分野の先生方が2、3名話す。我々は文系の先生と理系の先生1名ずつ講演があって、それぞれの講演に対して文と理の3名でそのあとパネルディスカッションをするという感じで、かなり激しい議論をするというところに特徴がある。例えば今年は「美」、美しいということに対して理系と文系の考え方、去年はAIについて理系と文系の考え方。公開講座も教員の学術越境とかを意識してやっています。

#### **齋木副研究科長：**

今の質問に関して一言申し上げますと、僕ら改組の時にかなり考えました。人間・環境学研究科、総合人間学部の初期の頃は、先生方は真剣に「人間・環境学とは何か」ということを定義することを非常に真面目にされていた。改組をするときに、でも25年経ってそれは作れましたかということを考えて、結局それができなかったところが議論の出発でした。ある意味、そこで僕ら改組に関わった教員のグループは「定義をするというのはやめよう」と開き直ったわけなんです。「学術越境」を表に出した理由は、何かカチッとしたディシプリンみたいなものがあり、それを人間・環境学あるいは総合人間学と呼ぶということではなくて、「そこを繋ごうとする営みそのものが人間・環境学であり、総合人間学である」というふうに考えたからです。もちろんそれを伝えようとする、結局三先生がおっしゃったように個別具体的な事例を見てもらうという形、「これも人間・環境学、これも総合人間学」という形で具体的なものを見てもらう、体験してもらうという形で知ってもらう。そういう形に僕らは結局開き直ったんだと思ってるんです。それは僕の個人的な思い。これから先の総合人間学というものをきちんと定義しようとか、人間・環境学を定義しようとか、これから若い世代がそれをトライする可能性はあるんですが、もしかしたら私みたいに引退直前の人は開き直ったまま卒業しようとか、そういうふうに思っています。

### 近藤真委員長：

ありがとうございます。最後に少し感想を述べたいと思います。外部評価委員を引き受けて思い出したのですが、私自身が部局長になるより少し前に学部で何かの委員会の委員長をやっていた時に、たまたま外部評価を受ける年にあたりました。その時の外部評価委員のお一人が元・公立はこだて未来大学の学長をなさっていた中島秀之さん。個人的にも知り合いなので、先生と言わずに「さん」と言いましたが。中島さんがその時におっしゃっていたのが、「いやいやこんなものを、大学の外からいろいろ呼んで外部評価なんてやらなくても、評価はマーケットが決めるよ。そんな文科省がやれと言うからやらなきゃいけないけど、そんなものは外部評価委員が決めることじゃなくて、受験生が決めるし、あるいは出口である社会の受け手が、卒業生の受け手である社会がきちんと評価して、いい教育をしていけば評価は上がっていくし、ダメな教育しかできていなかったら、その評価は暫時下がっていくはずなんだから」ということをおっしゃいました。実はそのことを真っ先に思い出しました。

そういう視点で言っても、とにかく学部の受験倍率を拝見しても非常に評価されているということはわかりますし、今日大学生の方から話を聞いていても、大学生の方たちがこの学部・研究科で享受している教育に対して満足して精力的に取り組んでいるというところも伺いました。資料にある卒業生のアンケートですが、我々のところではあんなにいい結果は出ない。「学んだことが役に立ってる」かどうかについて、学部にしろ、修士にしろ、卒業後3年アンケートでも、あんな割合はとても出ない。午前の研究科長のご説明にもあったように、実際雇用してる受け手の会社の方からも総合評価では京大の平均より若干低いんだけど、いろんな項目のところできちんと強みを出している卒業生・修了生を輩出されているということでしたので、私ごときがえらそうに評価できるようなものではなく、素晴らしい取り組みをされているということは痛感いたしました。お忙しいとは思いますが、今後も教育研究のより一層の向上に向けてご努力いただければと思う次第です。本日は本当にありがとうございました。

### 宮下研究科長：

ありがとうございます。我々にとっては本当に嬉しいご評価、ご意見をいただきました。我々自身も頑張っているつもりですが、どれくらい評価されているかというのは正直わからないです。午前中にも申し上げましたが、学内では「所詮、教養の流れだろう」という、そういうある種の色眼鏡で見られている部分はずっと残っています。とはいえ、業績を見ても、先生方の工夫を見ても、こういう取り組みを見ても、一生懸命やっているんじゃないかと思います。今回外部評価のための資料をまとめている間も「一生懸命やってるね、うち」という意見が出てくるくらい頑張っている。もちろん研究に特化した部局ではない部分もあるので、その中でも研究の成果も出しているところをご理解いただけているのかなというのが嬉しく思います。

また、予備校の指導では、総合人間学部は文系学部という位置づけなんです。だから文系学部に理系がくっついているようなイメージで受験生が捉えている部分があって、その部分は我々もちゃんと外部発信して、「これは理系も文系も一緒になってやっている部局なんだ」ということを知ってもらわなきゃいけないという問題意識は持っています。

学生の質ですが、入試の成績では全学的にも優秀な学生が入ってくる部局です。「優秀な学生が入ってきて4年後になって腐って出てくる」とそういう言われ方もするんですが、決して全員がそういうわけでもないので、それをなんとか払拭するような活動ができればいいと思っていますところ。ありがとうございました。

**近藤真委員長：**

ありがとうございました。それではお時間になりましたので、冒頭にも少し説明がございましたが、外部評価報告書作成について、再度研究科からお願いいたします。

**宮下研究科長：**

ありがとうございます。本委員会の終了後に、事務から各委員に、資料7の評価書の様式を送らせていただきます。この様式に、本日お聞きいただいた学部・大学院の教育活動、その成果、研究活動、研究の成果について、それぞれどんな評価をされるかをご自由に選択してください。また、総評という形でご自由に記載いただいて結構です。いいことだけを書いてほしいというわけでもなく、ご指摘事項があれば書いていただきたい。先ほど近藤真先生の方からご紹介がありましたように、例えば静岡大学の取り組み、こんな例があるので、こんな取り組みをしたらどうか、というご提案もあれば、それは我々にとっても非常に有効なものでありますので、ぜひご意見いただきたいと思います。この様式をメール添付でお送りしますので、11月28日を目途に返送いただければと思います。

もう一つは、本日こちらで録音をさせていただいたものや本日お配りした資料をまとめて報告書を作っていくわけですが、まずは議事録案についてこちらで作成しますので、それをご確認いただくというステップを作りたいと思います。「ここはもう個人的な発言なので載せないでほしい」とか、あるいは「ここはもうちょっと違うことを言ったんだ」とかいうことも出てくるかと思っておりますので、そういうことをご確認いただければ幸いです。

委員の皆さんのご意見をいただきましたら、資料8のこの項目に従って外部評価報告書を作らせていただきたいと思います。その上で、外部評価報告書はホームページに掲載して公表したいと考えています。資料もできるだけ全部載せたいと思いますが、例えば入試に関わる資料など公表できない資料はそれを除いた形で掲載ということにさせていただこうと思います。

委員の先生方をお願いする評価書の作成、あるいは外部評価報告書の構成案については、お話ししたとおり資料7、資料8のとおりでございます。以上です。

**近藤真委員：**

ありがとうございました。ただいまの報告書作成についての説明にご異議はございませんでしょうか。

(異議無し)

ありがとうございました。そういたしましたら、ここからの進行は研究科にお返しいたします。

**宮下研究科長：**

近藤真先生、本日は委員長をお務めいただきまして、本当にありがとうございました。また、委員の皆さんも長い時間お付き合いいただきまして、心より御礼申し上げます。評価書の作成や議事録案の確認などお手間をまた取らせていただきますが、その点どうぞよろしくお願いいたします。

本日もいろいろなご意見をいただきましたので、今後、我々の取り組みとして良いと思われている部分についてはどんどん伸ばしていきたいと思えます。また、いくつか課題をいただきました。例えば「研究を他者に語る」「研究を他者と語る」をどのように実質的に評価していくかということ。就職支援のことも課題として残っています。課題についてはメモさせていただきましたので、それについては引き続き取り組みをさせていただくということになると思えます。

これを機会に、総合人間学部、人間・環境学研究科のホームページをたまに訪れていただいて、「ちゃんとやっているかな」ということもご確認いただけたらなというふうに思います。

今回はご協力いただきまして誠にありがとうございました。里見委員におかれましてもZoomで長い間お付き合いいただきまして、どうもありがとうございました。

**里見委員：**

とんでもございません。ありがとうございました。

**宮下研究科長：**

それでは、長い時間どうもありがとうございました。これで総合人間学部／人間・環境学研究科の外部評価委員会を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

## 6. 外部評価委員からの評価書

### 近藤 和行 委員

#### 【各評価項目における評価】

(1：質の向上が求められる 2：相応の質にある 3：高い質にある 4：特筆すべき高い質にある)

項目名	評価
1. 総合人間学部の教育活動の状況	4：特筆すべき高い質にある
2. 総合人間学部の教育成果の状況	3：高い質にある
3. 大学院人間・環境学研究科の教育活動の状況	4：特筆すべき高い質にある
4. 大学院人間・環境学研究科の教育成果の状況	3：高い質にある
5. 大学院人間・環境学研究科の研究活動の状況	4：特筆すべき高い質にある
6. 大学院人間・環境学研究科の研究成果の状況	3：高い質にある

#### 【総評】

総合人間学部、人間・環境学研究科の教育・研究活動は総じて、新しい時代に望まれる人材育成が行われ、成果も期待できる状況にあると強く感じた。

同学部・研究科の教育・研究目的には、他大学や他学部とは異なる特徴的なキーワードがいくつか出てくる。「学術架橋力を備え」「狭い専門分野に閉じることなく」「視野の広い学際知を備え」「専門の枠にとらわれず学知の本質を伝える力」——などである。

想定される卒業生の活躍分野としては、大学教員、産業界、行政組織、海外大学、国際組織などが挙げられているが、一部を除き、そうした分野で最も必要になるのはコミュニケーション能力、他者との共同作業による問題解決能力だと考える。それを育成、強化する教育・研究活動が行われていると考える。

30年も昔の1995年、日経連（当時）が出したレポートは衝撃的だった。「新時代の日本的経営」と題した経営改革ビジョンである。当時の社会的課題であったグローバル化や低成長、少子高齢化などを乗り切るため、雇用形態を①長期蓄積能力活用型②高度専門能力活用型③雇用柔軟型——の3つに分類・差別化して、各社が雇用ポートフォリオを再構築すべきという内容だった。

少し説明すると、①は終身雇用を前提に専門知識、マネジメント能力を身につけ、企業や組織を指導する層、②は高い専門知識や実務能力を持ち、短期の雇用契約で高報酬を得ながら所属を

転じてゆく層、③は専門知識や能力に乏しく、契約解除が容易な短期雇用で「雇用の調整弁」とされやすい層である。

当時の日本社会は終身雇用、年功序列の気分が色濃く残っていたので、同レポートは懐疑的に受けとめられた。しかし、21世紀初頭の改正派遣法の影響などあって、おおむねその方向に進んでいる。ただ、想定以上に上記の③層が膨らみ、社会にゆがみをもたらしている。かつこの階層構成は企業社会だけでなく、われわれの経済社会全体を覆っているようにも思える。

同学部・研究科の卒業生は、企業・行政人か研究者か国際人かは別にして、大半が①または②層に向かうと思われる。②層で専門知識を生かし「一匹狼」的に生きる（生きることが可能な）人材は、従前の教育・研究の方向性で良いかもしれない。

しかし今、必要とされる人材、社会を大きく変革できる人材は①層だと思う。幅広い専門知識や教養を基盤に持ち、コミュニケーション能力に優れ、調整力をもってプロジェクト（または社会課題の解決等）を推進できる人物、多様な専門人材を上手に使い、課題を解決できる人材ではないか。同学部・研究科の、とりわけ教育方針はそれに合致すると感じた。

ちなみに、現代社会に求められる「コミュニケーション力が高く、専門的知識や能力が高い人材」の対極は、「コミュニケーション力が低く、専門的知識や能力に乏しい人材」ではない。「コミュニケーション力に難があり、専門知識や能力はあるが、意思疎通が難しい専門家もどき」である。視野や了見が狭く、エキセントリックな「専門家気取り」が、しばしば企業や組織などの現場でトラブルの源となっている。

学部の教育活動で、「専門外の人に研究内容を分かりやすく語るコミュニケーション能力や、多様かつ総合的な視点で物事を観る能力を養う」ために始めた、「研究を他者に語る」が卒業要件になっているのはとても良い。7割を超す学生がその意義を認めているのも今後に期待を抱かせる。その評価・測定方法には課題を残しているが。

副専攻制度に関しても前向な評価が平均で9割を超えた。同学部の特徴である「学際」を超えて学ぶ教育が、学生の評価も相当に高いと思った。

成果に関しては卒業先・進学先やアンケート結果を見る限り評価できる。一方、今回設定していただいた学部生・院生へのインタビューでは、体系的に深く学びたい場合に「学部内で完結しないのがやや不満」という声が印象に残った。少数意見かもしれないが、他学部も含めた聴講可能講座の運用に改善の余地があるのかもと思った。

研究科の教育に関する活動・成果と研究の活動・成果についても高く評価したい。

教育について、「広い視野と高度な知識」のみならず、「高い倫理性と強い責任感」をもって取り組むことのできる研究者、指導者、実務者を養成すると、その目的をうたっているのが心強い。

「異なる分野の専門家と協働して問題を解決する学術越境経験を通じて、学術架橋力を備えた人物を養成」し、「視野の広い学際知を備えた人物を養成」するという目的もすばらしく、内容

は目的に沿ったものである。「学術越境基礎」で自らの専門分野の在り方を問い直し、学部科目の発展形態である「研究を他者と語る」も必須とし分野を超えた対話の経験を積ませているのが良かった。学術越境センターのプログラムも学生に多くの気づきを与えているようで、体制、内容とも大いに評価できる。

研究科も、こうした成果についての評価方法をどうするかについてやや課題は残しているように思った。

研究科の研究活動も、狭い専門分野に閉じることなく、視野の広い学際知を備え、専門の枠にとらわれずに学知の本質を伝える力・教養知を養成する——と一貫している。学際越境プロジェクトへの取り組み状況などを見ても活動は高い水準を維持しているほか、研究成果に関しても基本的に水準を超えていると判断した。

全体を通して気になったことが2つある。

ひとつは、学部・研究科を通して全体の理念・教育方針は素晴らしいが、「学術越境」に関してその意義を認めている学生が、「肌感覚で1割程度」（担当教授）という思わぬ低さに少し驚いた。学部から修士、博士と専門が深化するなかで、専門分野の追求に忙しく、視野や寄って立つ基盤の拡大に意味を見出しにくくなるのだろうか。

徹底して狭い分野を深掘りする「専門家」はもちろん必要だが、異なる知がぶつかり融合してこそ新時代が拓ける。それが総合人間学部、人間・環境学科の基本的な方向性だと思っていたので、少し寂しい気がした。

もうひとつは、研究者の外部からの「獲得」である。先日、ある旧帝大に関する記事で、「海外の本当に優秀な研究者は個人事業主的で年俸が高い。継続的に受け入れるには財務基盤、獲得戦略、契約などの整備が必要」というコメントを見かけた。世界を視野に研究実績を積み上げるためには必要な面があるとは思いますが、外部からの研究者受け入れや獲得が、優先すべき主要 KPI と位置付けられているのなら、違和感を感じる。

当学部・研究科は違うとは思いますが、教育や研究資源の主要な投入先は、受け入れ・獲得ではなく教育・育成であって欲しいと思う。

## 近藤 真 委員

### 【各評価項目における評価】

(1 : 質の向上が求められる 2 : 相応の質にある 3 : 高い質にある 4 : 特筆すべき高い質にある)

項目名	評価
1. 総合人間学部の教育活動の状況	3 : 高い質にある
2. 総合人間学部の教育成果の状況	3 : 高い質にある
3. 大学院人間・環境学研究科の教育活動の状況	3 : 高い質にある
4. 大学院人間・環境学研究科の教育成果の状況	3 : 高い質にある
5. 大学院人間・環境学研究科の研究活動の状況	3 : 高い質にある
6. 大学院人間・環境学研究科の研究成果の状況	3 : 高い質にある

### 【総評】

総合人間学部および大学院人間・環境学研究は、その教育活動、教育成果、研究活動、研究成果のすべての面において「高い質にある」と判断される。

総合人間学部の教育活動については、その目標である学際的な教育を実質化するための特色ある取り組みとして「研究を他者に語る」が必修化されており、学生からの聞き取りにおいても、この授業が学生から非常に高い評価を得ていることが確認された。また、学生が個々の興味・関心に応じて積極的に他学部で開講されている授業を履修していることなど、学生一人一人に応じた学際的な教育が展開されており、「高い質にある」と判断される。

総合人間学部の教育成果については、企業・官公庁等向けアンケート調査において「国際性、異文化理解力」、「企画力、創造性」、「課題解決力」、「思考力、判断力」、「責任感」、「多角的視点、広い視野」、「説明力」、「実行力」について、京都大学全体の平均よりも高い評価を得ており、総合人間学部の教育の特徴を反映した成果が出ているといえる。また、卒業時および卒業生に対するアンケートにおいても、総合人間学部での学びが学生から高く評価されていることが確認でき、総合人間学部の教育成果は総じて「高い質にある」と判断される。

大学院人間・環境学研究科の教育活動については、学際的な教育を担保する取り組みとして「学術越境基礎」、「研究を他者と語る」、「学術越境研究計画」といった授業科目が開講されているとともに、博士後期課程の大学院生に対して教育力を養うための「教養教育実習」が開講されるなど、研究科の教育目標に応じた授業科目だけでなく、アカデミアに進む大学院生の修了後を見据えた授業科目が開講されており、「高い質にある」と判断される。

大学院人間・環境学研究科の教育成果については、企業・官公庁等向けアンケート調査において「協調性、コミュニケーション能力」、「リーダーシップ」、「倫理観」、「責任感」、「英語運用能力（文章読解、記述）」、「英語運用能力（会話）」、「国際性、異文化理解力」、「専門知識とその活用能力」といった項目において京都大学全体の平均よりも高い評価を得ており、研究科の教育の特徴を反映した成果が出ているといえる。また、修了時および修了生に対するアンケートにおいても、修士論文、博士論文に関わる研究、およびそれに伴う勉学について非常に高い評価が得られていることなどから、大学院人間・環境学研究科の教育成果は「高い質にある」と判断される。

大学院人間・環境学研究科の研究活動については、学術越境センターの設置、学際的研究プロジェクトのたちあげなど、その研究目標に即した体制が整備されており、学内外から幅広く研究者を受け入れるなど、学際的研究の推進体制が整っている。また、若手研究者への出版助成といった研究活動の活性化のための取り組みにも力を入れている。これらのことから、大学院人間・環境学研究科の研究活動は総じて「高い質にある」と判断される。

大学院人間・環境学研究科の研究成果については、科学研究費助成事業の採択率がほとんどの年度において40%以上であること、若手研究者出版助成の助成対象が30件近くの学会賞を受賞していること、多くの学生が筆頭著者として学会発表や論文の発表を行うとともに、各種受賞といった成果をあげていることなどから、「高い質にある」と判断される。

## 里見 朋香 委員

### 【各評価項目における評価】

(1 : 質の向上が求められる 2 : 相応の質にある 3 : 高い質にある 4 : 特筆すべき高い質にある)

項目名	評価
1. 総合人間学部の教育活動の状況	4 : 特筆すべき高い質にある
2. 総合人間学部の教育成果の状況	3 : 高い質にある
3. 大学院人間・環境学研究科の教育活動の状況	3 : 高い質にある
4. 大学院人間・環境学研究科の教育成果の状況	3 : 高い質にある
5. 大学院人間・環境学研究科の研究活動の状況	3 : 高い質にある
6. 大学院人間・環境学研究科の研究成果の状況	3 : 高い質にある

### 【総評】

総合人間学部については、積年の課題を踏まえて、1学科10講座に再編されるという大改革を成し遂げられたことに敬意を表したいと存じます。

3通り(外国人留学生選抜を含め4通り)の入学選抜をよって興味関心の明確な、自立した学生の獲得に成功しておられ、入学後の的確な研究指導を経て、学会発表で筆頭著者となっている学部学生を多数輩出するに至っていることは特筆すべき成果と考えます。

教育体制としても、高いST比を生かした指導教員・教員アドバイザー制、外国語対応も可能な独自の学生相談室の設置など、学内他学部や他大学にもない、非常に手厚い学修環境を整備されていると感じました。

また学生は、学生の関心を把握してカリキュラムを調整されている教員に好感を示しており、教員が対話の姿勢を示されていることが学生にも伝わっていると感じました。

他方、学生からは選択肢が多く進路に悩む、興味が別の分野に移ったり指導教員が退職したりしたときに教えてくれる教員が学部内に見つからない、文系・理系で示されている履修モデルが大雑把なので、他学部の履修モデルを参考にしている、といった声がありました。学生が「仲間探し」に苦労しているようにも見受けました。

その意味で「総人ゼミ」「研究を他者に語る」など、学生同士の接点を増やす取組は重要であると考えます。3年生アンケートでは教員アドバイザーを訪れたことがない学生が5割を超えており、学修相談の仕組みが使われずに学生が自分の居場所を確立できないとすれば残念です。専門分野を体系的に学修できる他学部での学修モデルについての情報提供・ガイダンスや、他学部

学生との情報交換、身近な先輩からのアドバイスを受けるきっかけなど横と縦の繋がりがより増えれば、自力で解決できる学生も多いのではないかと考えます。

人間・環境学研究科については、教養教育実習を通じて、教えるスキルを身に付けさせる、いわゆるプレFDを行い、単位化していることが特筆されると思いました。また、学際研究演習はプレゼンが求められる科研費などの申請の際にも大いに役立つのではないかとわれ、学術越境プログラムとの相乗効果が期待されました。大学院生の教職への就職率や科研費獲得率を把握され、経年変化を見ていかれるとより効果が明らかになるように思います。

学生との懇談では、学生は指導教員の指導を受けたくて人環を選んだとの回答を得ており、教員の研究の幅の広さが修士学生の増加に繋がるだろうことを考えると、修士課程のカリキュラムの魅力をさらに上げることで応募者を増やす戦略は難しいだろうと感じました。

その中であっても、「学術越境」をさらに推し進めて、他分野の研究者との共同研究のきっかけを増やすことや、修士学生の約6割が就職することに着目した産学連携や就職支援を充実することは学生のニーズに沿うのではないかと考えます。

全体として、自学自習の京都大学にあって、学部から大学院まで、非常に作り込まれた教育活動をされていることが大きな特長であると認識しました。また、教員の方々が、どのような学生の興味関心も受け入れるオープンな雰囲気を作られ、学生同士の切磋琢磨の機会を増やすことに取り組んでおられることに感銘を受けました。

外部評価に際し、膨大な基礎資料をまとめ上げ、自らを省みられる作業が学部・研究科をあげてなされたことがうかがわれました。外部委員による評価そのものよりも、外部評価のプロセスを通じた自己認識と、課題を自ら改善し続ける姿勢こそが重要であると考えます。貴学部・研究科のますますのご発展を祈念しております。

## 松永 是 委員

### 【各評価項目における評価】

(1 : 質の向上が求められる 2 : 相応の質にある 3 : 高い質にある 4 : 特筆すべき高い質にある)

項目名	評価
1. 総合人間学部の教育活動の状況	3 : 高い質にある
2. 総合人間学部の教育成果の状況	3 : 高い質にある
3. 大学院人間・環境学研究科の教育活動の状況	3 : 高い質にある
4. 大学院人間・環境学研究科の教育成果の状況	2 : 相応の質にある
5. 大学院人間・環境学研究科の研究活動の状況	3 : 高い質にある
6. 大学院人間・環境学研究科の研究成果の状況	3 : 高い質にある

### 【総評】

全般的に、総合人間学部、人間・環境学研究科ともに教育、研究に意欲的に取り組んでいることに大変感銘を受けた。

特に総合人間学部は、幅広い知識と教養を身につけた人物の育成を目的に、文系入試、理系入試、特色入試など入学試験の工夫、自らの専攻を大学3年時に自由に選択できるレイトスペシャライゼーションの仕組みの導入、副専攻の必修化など、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーを踏まえて教育に当たっているのが伝わる。教育は、自然科学、社会学、人文科学について、高度人材を育成することを目的としており、教育活動および成果の状況は高い質にあると認められる。

人間・環境学研究科は令和4年度まで3専攻14講座体制で教育を行ってきたが、令和5年度から1専攻10講座体制となった。本研究科は、環境、自然、人間、文明、文化を対象とする幅広い学問分野にわたり、人間と環境のあり方について根源的な理解を深めるとともに、近い将来だけでなく遠い未来をも見据えた先駆的な研究の推進、教育研究における国際連携の強化、自然科学・人文科学・社会科学の垣根を越えた総合的な教育研究を行っている。教育活動は高い質にあると判断できる。成果も相応の質にある。

京都大学の基本理念として、研究の自由と自主を基礎に、高い倫理性を備えた研究活動により、世界に卓越した知の創造を行うことをうたっている。さらに、総合大学として、基礎研究と応用研究、文科系と理科系の研究の多様な発展と統合を図ることをめざしている。

研究成果は、国際的なジャーナルへの掲載、引用数の多い論文の発表などが数多く存在するとともに、学会賞を受賞した業績も少なくない。これらのことを勘案して、本研究科の研究活動は高い質にあると判断できる。

## 7. 外部評価委員会配布資料

(1) 人環レビュー 教育・研究活動に係る自己点検・評価報告書 令和7年9月

[https://www.h.kyoto-u.ac.jp/academic/data/jinkan\\_review\\_2024/](https://www.h.kyoto-u.ac.jp/academic/data/jinkan_review_2024/)

(2) 京都大学総合人間学部パンフレット

[https://www.h.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2025/04/soujin\\_pamphlet\\_2025.pdf](https://www.h.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2025/04/soujin_pamphlet_2025.pdf)

(3) 京都大学大学院人間・環境学研究科パンフレット 2025-2026(令和7-8)

[https://www.h.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2025/03/jinkan\\_pamphlet\\_2025.pdf](https://www.h.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2025/03/jinkan_pamphlet_2025.pdf)

(4) 総合人間学部便覧（令和6年度以降入学者用）令和7年度

(5) 総合人間学部履修モデル&教員プロフィール〈講座版〉令和7年度

(6) 大学院人間・環境学研究科学生便覧 令和7年度

(7) 総人・人環フォーラム

Vol.42（2024年2月発刊）、Vol.43（2025年2月発刊）

[https://www.h.kyoto-u.ac.jp/academic/publication/soujin\\_jinkan\\_forum/](https://www.h.kyoto-u.ac.jp/academic/publication/soujin_jinkan_forum/)

(8) プレゼンテーション資料

① 京都大学大学院人間・環境学研究科／総合人間学部の概要と取り組み

京都大学大学院人間・環境学研究科／  
総合人間学部の概要と取り組み

令和7年10月24日 外部評価委員会

大学院人間・環境学研究科  
研究科長 宮下 英明

京都大学



KYOTO UNIVERSITY

1

大学院人間・環境学研究科／総合人間学部の概要

**総合人間学部の教育研究上の目的**

総合人間学部は、人間と文明と自然の結び付きに新たな次元を確立するために、人類が直面する様々な問題を人間活動の広範な諸領域を通過させる形で問い直し、これまでの人文科学、社会科学、自然科学を融合した新しい学問の体系を構築することを、すなわち、新たな「人間の学」の創出を目指す。さらに、このような学問的探求を通じて、**科学技術の急速な発展と国際化の進展など著しく変化するこれからの社会に対して、持続的かつ創造的に対処しうる広い視野を持った人材を育成**することを目的とする。（京都大学通則第3条の3より）

**大学院人間・環境学研究科の教育研究上の目的** **学術越境**

人間・環境学研究科は、環境、自然、人間、文明、文化を対象とする**幅広い学問分野の越境を通して**、人間と環境のあり方についての根源的な理解を深めるとともに、近い将来だけではなく遠い未来をも見据えた先駆的研究の推進、教育研究における国際連携の強化、自然科学・人文科学・社会科学の垣根を越えた総合的な産学官連携に資する研究と教育によって、**人間及び環境の問題に対して広い視野と高度な知識、高い倫理性と強い責任感をもって取り組むことのできる研究者、指導者、実務者を養成**することを目的としています。（京都大学通則第35条の2より）

KYOTO UNIVERSITY

2



## 大学院人間・環境学研究科／総合人間学部の概要

### 講座構成（改組後）

#### 1. 数理・情報科学

数理学・情報科学

#### 2. 人間・社会・思想

哲学・思想・社会科学・教育学

#### 3. 芸術文化

文学・芸術学・映像メディア研究・音楽

#### 4. 認知・行動・健康科学

心理学・神経科学・運動科学・精神医学・生理学

#### 5. 言語科学

言語学・言語教育学・外国語学習

#### 6. 東アジア文明

歴史学・社会学・文学・思想・地域研究

#### 7. 共生世界

国際関係・歴史学・社会科学・法学・経済学・政治・政策

#### 8. 文化・地域環境

地理学・文化人類学・考古学・建築学

#### 9. 物質科学

物理学・化学

#### 10. 地球・生命環境

地球科学・生物科学

### 学術越境センター

（午後に詳細説明）

KYOTO UNIVERSITY

5

令和7年4月現在

#### 1. 数理・情報科学講座

微分方程式論、力学系、確率解析等の解析学を中心とした数理学と、計算理論から人工知能、視聴覚情報処理までの幅広い情報科学

教授	足立匡義	上木直昌	木坂正史	角大輝	立木秀樹	日置尋久
准教授	櫻川貴司	ディプレクト、マシュー	林雅行			
講師	ティース、ホルガー					
助教						

#### 2. 人間・社会・思想講座

人間存在とその思想、社会の原理的究明にもとづいて、言語・思想を介して社会を理解し生きる人間の具体的な行動や発達を解明する

教授	青山拓央	安部浩	石岡学	大倉得史	倉石一郎	佐藤義之	柴田悠	戸田剛文	永田素彦
	西山教行	細見和之							
准教授	小林哲也	タジャン、ニコラ	松本卓也	朴 沙羅	田代藍				
講師									
助教									

KYOTO UNIVERSITY

6

### 3. 芸術文化講座

小説、詩、演劇などの文学作品から映画、舞台芸術、美術、音楽に及ぶ  
広範な創造行為を対象とする総合的な芸術研究

教授	池田寛子	勝又直也	木下千花	森山智成	小島基洋	菅利恵	武田宙也	吉田恭子
准教授	上田泰史	合田典世	霜田洋祐	須藤秀平	田口かおり	中筋朋	中村仁紀	仁井田千絵
講師								
助教								

### 4. 認知・行動・健康科学講座

認知機能、運動制御、身体と精神の健康等に関する研究を融合した  
総合的な認知・行動・健康科学研究

教授	内田由紀子	久代恵介	神崎素樹	小村豊	齋木潤	月浦崇	林達也	船曳康子
准教授	上田祥行	江川達郎	萩生翔大					
講師								
助教	森山真衣	山本洋紀						

KYOTO UNIVERSITY

7

### 5. 言語科学講座

言語理論、言語記述、言語教育・外国語学習への応用から、  
言語の諸側面にアプローチし、言語の本質を多角的に捉える

教授	柿原武史	河崎靖	谷口一美	デビッド・ダルスキー	塚原信行	守田貴弘	柳瀬陽介
准教授	和泉絵美 西脇麻衣子	金丸敏幸 ピーターソン、マーク	ギンズバーグ、 ジェイソン	堀口大樹	笹尾洋介 横森大輔	中森誉之	
講師							
助教							

### 6. 東アジア文明講座

歴史的・文化的・社会的特性の解明を基軸とした  
東アジア文明の総合的な研究

教授	太田出 尋 松江崇	大原嘉豊 吉江崇	尾野善裕	小野寺史郎	熊谷隆之	佐野宏	須田千里	辻正博	長谷川千
准教授	上杉智英	郭旻錫	津守陽	永島明子	二宮美那子	福谷彬			
講師									
助教									

KYOTO UNIVERSITY

8

## 7. 共生世界講座

人文・社会諸科学の領域横断的アプローチによる、持続可能な共生世界・共生社会の実現に向けた総合知の創出

教授	浅野耕太	小畑史子	齋藤嘉臣	佐藤公美	佐野巨	大黒弘慈	縄田浩志	見平典	森口由香
准教授	菊池亨輔	柴山桂太	徳永悠	福元健之	三代川寛子				
講師	バッテ, パラヴィ								
助教	鶴飼大介								

## 8. 文化・地域環境講座

フィールドワークを方法論の基軸として、文化・地域環境の生成、展開、保全を研究し、現代社会における文化・地域環境の構築法を探究する

教授	石井美保	岩谷彩子	風間計博	小島泰雄	神野恵	清野孝之	中嶋節子	馬場基	山村亜希
准教授	久木元美琴	前田昌弘	山崎健	脇谷草一郎	デ・アントーニ, アンドレア				
講師									
助教	梶丸岳	藤原学							

KYOTO UNIVERSITY

9

## 9. 物質科学講座

物質の構造・機能・分析・物性に関する実験的および理論的研究

教授	内本喜晴	木下俊哉	小松直樹	高木紀明	田部勢津久	津江広人	中村敏浩	藤田健一
	藤原直樹	舟橋春彦	森成隆夫	吉田鉄平	吉田寿雄			
准教授	廣戸聡							
講師	浅沼尚							
助教	小山田明	小西隆士	佐野光貞	許健	新林卓也	高橋弘樹	渡邊雅之	

## 10. 地球・生命環境講座

マクロとミクロ、理論と現象を包含する視座からの地球惑星の変動と進化、生物の種間関係および生命機能の研究

教授	石村豊穂	市岡孝朗	小木曾哲	瀬戸口浩彰	西川完途	宮下英明		
准教授	加藤護	土屋徹	角山雄一	三浦智行				
講師								
助教	桑野太輔	阪口翔太	佐藤博俊	幡野恭子	藤井悠里	原社大朗		

KYOTO UNIVERSITY

10

## 大学院人間・環境学研究科／総合人間学部の概要

### 教職員数

令和6年5月1日現在

#### 【基幹教員】

性別\職名	教授	准教授	講師	助教	合計
男	55	26	2	15	98
女	10	8	1	3	22
合計	65	34	3	18	120

文系／理系比率  
(人文学・社会科学) / (数学・自然科学)  
約 7 : 3

#### 【流動教員・併任教員・協力教員・客員教員・特定教員・特定教員（白眉センター）】

	流動教員*1	併任教員*2	協力教員*3	客員教員*3	総計	外国人招へい研究員(客員教員)	特定教員	特定教員(白眉センター)
教授	4	6	7	5	22	1	0	0
准教授	1	0	6	4	11	1	1	1
講師	0	0	0	0	0	0	1	0
助教	1	0	0	0	1	0	2	3
合計	6	6	13	9	34	2	4	4

#### 【事務部・技術部】

事務部	技術部	合計
8	7	15

- \*1 地球環境学堂への時限的出向（両任）
- \*2 国際高等教育院への時限的出向（両任）
- \*3 他部局からの教育支援（兼任）
- \*4 京都国立博物館、奈良文化財研究所

KYOTO UNIVERSITY

11

## 大学院人間・環境学研究科／総合人間学部の概要

### 学生数

令和6年5月1日現在

#### 【総合人間学部】入学定員 120名/年

学部学生			留学生数(内数)			科目等履修生、特別聴講学生等
男	女	計	男	女	計	
427	154	581	2	8	10	19

#### 【修士課程】入学定員 164名/年

学生数			社会人学生数(内数)			留学生数(内数)			特別聴講学生、研究生、特別研究学生等
男	女	計	男	女	計	男	女	計	
181	125	306	13	14	27	44	41	85	32

#### 【博士後期課程】入学定員 68名/年

学生数			社会人学生数(内数)			留学生数(内数)		
男	女	計	男	女	計	男	女	計
166	148	314	42	43	85	42	50	92

KYOTO UNIVERSITY

12

大学院人間・環境学研究科／総合人間学部の概要

入学状況

【総合人間学部】

年度	(一般入試)															特色入試				
	全体					文系					理系					募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数					
2020 (R2)	115	406	384	117	117	62	203	201	63	63	53	203	183	54	54	5	42	42	5	5
2021 (R3)	115	435	399	118	117	62	242	216	63	63	53	194	183	55	54	5	49	49	5	5
2022 (R4)	115	399	374	118	118	62	192	189	63	63	53	207	185	55	55	5	35	35	5	5
2023 (R5)	116	416	396	118	118	63	224	212	64	64	53	192	184	54	54	5	39	39	4	4
2024 (R6)	116	456	395	119	119	63	234	215	64	64	53	222	180	55	55	5	41	41	4	4

・特色入試において最終的な入学手続者が募集人員に満たない場合には、残余の募集人員は一般入試の募集人員に加える。

(入学者数・入学定員充足率)

年度	①	②	③	④	再入学・ 入学・ 学士 入学 者 数 合計	①～ ④の 合計	入学 定員	入学定員 充足率		
	(一般) 入学者	特色 入試	外国人 留学生 特別 選抜	Kyoto iUP					編入 学者	
2020 (R2)	117	5	3	0	0	1	126	125	120	104.2%
2021 (R3)	117	5	2	0	0	0	124	124	120	103.3%
2022 (R4)	118	5	2	0	0	1	126	125	120	104.2%
2023 (R5)	118	4	2	1	0	0	125	125	120	104.2%
2024 (R6)	119	4	1	0	0	0	124	124	120	103.3%

選抜方法 (入学定員120)

- ① 一般入試 (文系入試62/理系入試53)  
(前期試験のみ、後期試験なし)
- ② 特色入試 (5)
- ③ 外国人留学生特別選抜 (若干名)
- ④ Kyoto iUP (上限1)

13

大学院人間・環境学研究科／総合人間学部の概要

入学状況

【修士課程】

選抜方法 (入学定員164)

- 1) 第1回選抜試験 (9月) 123 (筆記試験、面接)
- 2) 第2回選抜試験 (2月) 41+α (筆記試験、面接)

年度	入学定員	志願者数	合格者数	入学者数	入学定員充足率 (%)	入学者数			再入学者数	総合人間学部からの進学者 (内数)	社会人 (内数)
						男	女	計			
2020 (R2)	164	323	168	159	97.0	95 (11)	64 (25)	159 (36)		37	3
2021 (R3)	164	281	138	132	80.5	75 (13)	56 (24)	131 (37)	1(男)	25	12
2022 (R4)	164	306	152	141	86.0	82 (16)	59 (20)	141 (36)		37	10
2023 (R5)	164	293	148	140	85.4	79 (19)	61 (21)	140 (40)		27	10
2024 (R6)	164	319	156	141	86.0	82 (25)	59 (20)	141 (45)		33	12

KYOTO UNIVERSITY

( ) 内は留学生数で内数

14

大学院人間・環境学研究科／総合人間学部の概要

入学状況

【博士後期課程】

選抜方法（進学+編入学）定員68

- 1) 編入学生特別選抜（社会人特別選抜）（9月）（口頭試問）
- 2) 修士課程からの進学（修士研究で「優」を得たうちの進学希望学生）
- 3) 編入学生選抜試験（2月）（筆記試験、面接）

年度	入学定員	編入学志願者数	合格者数	入学人数	入学定員充足率(%)	進学者数			編入学者数			再入学者数	入学者合計			社会人(内数)
						男	女	計	男	女	計		男	女	計	
2020 (R2)	68	41	83	83	122.1	29	22	51	17	14	31	1(男)	47	36	83	24
						(6)	(9)	(15)	(5)	(4)	(9)		(11)	(13)	(24)	
2021 (R3)	68	31	76	71	104.4	31	17	48	14	9	23		45	26	71	23
						(8)	(6)	(14)	(3)	(6)	(9)		(11)	(12)	(23)	
2022 (R4)	68	34	66	64	94.1	22	16	38	17	9	26		39	25	64	17
						(5)	(3)	(8)	(5)	(6)	(11)		(10)	(9)	(19)	
2023 (R5)	68	34	72	68	100.0	21	20	41	15	12	27		36	32	68	23
						(3)	(8)	(11)	(7)	(6)	(13)		(10)	(14)	(24)	
2024 (R6)	68	39	77	74	108.8	22	22	44	17	13	30		39	35	74	15
						(7)	(7)	(14)	(7)	(6)	(13)		(14)	(13)	(27)	

KYOTO UNIVERSITY

( ) 内は留学生数で内数

15

大学院人間・環境学研究科／総合人間学部の概要

総合人間学部卒業生の進路

	卒業年度	2020 (R2)			2021 (R3)			2022 (R4)			2023 (R5)			2024 (R6)		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
	卒業生数	72	26	98	94	50	144	92	28	120	79	38	117	89	38	127
大学院研究科		26	9	35	41	18	59	36	7	43	34	9	43	34	6	40
進路別人数	人間・環境学研究科への進学者数(内数)	17	7	24	27	10	37	22	5	27	22	9	31	26	4	30
	大学学部	1	1	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	進学(合計)	27	10	37	41	19	60	36	7	43	34	9	43	34	6	40
	就職	37	16	53	47	27	74	49	18	67	38	26	64	47	28	75
	その他*	8	0	8	6	4	10	7	3	10	7	3	10	8	4	12
	進学率(%)	37.5	38.5	37.8	43.6	38.0	41.7	39.1	25.0	35.8	43.0	23.7	36.8	38.2	15.8	31.5
	就職率(%)	51.4	61.5	54.1	50.0	54.0	51.4	53.3	64.3	55.8	48.1	68.4	54.7	52.8	73.7	59.1

※「その他」の主な内訳：外国の学校等へ入学した者、進学準備、就職準備、帰国留学生、一時的な仕事に就いた者、進路について大学に届け出のない者等

KYOTO UNIVERSITY

16

## 大学院人間・環境学研究科／総合人間学部の概要

### 修士課程修了者の進路

年度	2020 (R2)			2021 (R3)			2022 (R4)			2023 (R5)			2024 (R6)		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
修了者数	95	59	154	96	63	159	71	63	134	80	63	143	78	53	131
進学(大学院)	33	19	52	25	17	42	22	19	41	27	21	48	28	17	45
人間・環境学研究科へ進学(内数)	(28)	(17)	(45)	(22)	(16)	(38)	(20)	(19)	(39)	(21)	(21)	(42)	(28)	(17)	(45)
進学(大学院以外)	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
就職	52	29	81	61	35	96	43	30	73	42	29	71	47	33	80
その他	10	10	20	10	11	21	6	14	20	11	13	24	3	3	6
大学院進学率	34.7	32.2	33.8	26.0	27.0	26.4	31.0	30.2	30.6	33.8	33.3	33.6	35.9	32.1	34.4
就職率	54.7	49.2	52.6	63.5	55.6	60.4	60.6	47.6	54.5	52.5	46.0	49.7	60.3	62.3	61.1

※「その他」の主な内訳：修了後の進路について大学に届け出のない者、就職準備、無業者、家事手伝い、帰国留学生、一時的な仕事に就いた者

### 博士後期課程修了者・研究指導認定退学者の進路

年度	2020 (R2)			2021 (R3)			2022 (R4)			2023 (R5)			2024 (R6)		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
修了者数 <sup>1)</sup>	39	34	73	27	23	50	32	18	50	52	25	77	32	24	56
進学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	1
就職	33	18	51	22	11	33	22	13	35	33	12	45	25	16	41
その他 <sup>2)</sup>	6	16	22	5	12	17	10	5	15	18	13	31	6	8	14
就職率	84.6	52.9	69.9	81.5	47.8	66.0	68.8	72.2	70.0	63.5	48.0	58.4	78.1	66.7	73.2

<sup>1)</sup> 博士後期課程修了者と研究指導認定退学者の合計であり、研究指導認定退学後に学位を取得した者は含まれない。

・就職年度は、学位授与者では学位授与年度、学位未授与の研究指導認定退学者では退学年度とした。

KY<sup>2)</sup> 主な内訳：専修学校・外国の学校等入学者、進学準備中の者、就職準備中の者、修了後の進路について大学に届け出のない者

17

## 大学院人間・環境学研究科／総合人間学部の概要

### 学術越境センター

(午後に詳細説明)



学術架橋力を備え「総合知」の創出に資する人物の輩出

KYOTO UNIVERSITY

18

## 大学院人間・環境学研究科／総合人間学部の特徴的な取り組み

### 京都大学の教養・共通教育への貢献

大学院人間・環境学研究科の教員は、全学共通科目の担当を通して、京都大学の教養・共通教育の主力となっている。

### 部居独自の学生相談室の設置

人間環境学研究科／総合人間学部学生相談室は平成28年度の開室以来、心理面、学業面、生活面の相談に応じ、学生だけでなく、教職員や保護者に対しても助言や支援を行ってきた。令和2年度より、平日5日間の開室となり、令和5年度には年間1,300件（のべ数）を超える面接回数となった。開室日には多くの面接枠が埋まる状況が続いている。こうした個別の面談以外にも、緊急対応、人権相談窓口への心理学的知見の提供、部局運営への心理学的助言などを実施してきている。



KYOTO UNIVERSITY

19

## 大学院人間・環境学研究科／総合人間学部の特徴的な取り組み

### 男女共同参画実現のための最近の取組

1. 人環教職員向け男女共同参画推進のための相談窓口設置（令和5年度）
2. 授乳室の設置（令和5年度）
3. ベビーチェア・ベビーシートの設置（令和6年度）
4. 人間・環境学研究科棟の女性トイレ及び多目的トイレの改修（令和6年度～）
5. 生理用品の提供（令和7年8月～）
6. 教職員向け男女共同参画推進講演会の実施（令和4年度、7年度）



KYOTO UNIVERSITY

20

②総合人間学部 学部の教育面での特色ある取り組みについて

総合人間学部  
学部の教育面での特色ある  
取り組みについて

京都大学総合人間学部  
学部教務委員会委員長 佐野 宏

KYOTO UNIVERSITY

京都大学



1

総合人間学部 学部の教育面での特色ある取り組みについて


2025年10月24日（金）外部評価委員会

**時代認識**

- ・ 世界＝人間社会を第一義に指す
- ・ しかし「人間だけの世界」では済まされない
- ・ 温暖化・環境破壊 → 生物圏全体が危機に直面
- ・ 動植物だけでなく微生物まで含めた生命圏の維持
- ・ この星に生きる人間学

KYOTO UNIVERSITY

京都大学



2

2025年10月24日（金）外部評価委員会

### 学部の使命

- ・人と人をつなぐ、互いを結ぶ
- ・人と自然をつなぐ
- ・多様性を尊重し、分断を防ぐ
- ・「多様性をつなぐ人材」を育成
- ・ Interdisciplinary Hub for Integrated Human Studies :  
総合人間学の学際拠点

KYOTO UNIVERSITY



京都大学



3

2025年10月24日（金）外部評価委員会

### 総合人間学部ディプロマ・ポリシー

総合人間学部は、人間と文明と自然との新たな結びつきを見出す「**人間の学**」の創出をめざしています。この学問的追究を通して、高い倫理性と幅広い視野から、創造的かつ持続的に諸問題と向き合い、多様な人々と協働しながら問題解決のためのリーダーシップを発揮する人材の育成を目的としています。

KYOTO UNIVERSITY



Faculty of Integrated Human Studies

京都大学



4

2025年10月24日（金）外部評価委員会

### 教育の特色

- ・ 入門科目：より多くを**知る**（基礎リテラシーの獲得）
- ・ 総人ゼミ：具体的研究に**触れる**（フィールド・少人数ゼミ）
- ・ 主専攻＋副専攻：専門を内外から**観る**（学際統合の視点）  
→入試の**理系・文系**とは無関係に自由に専攻が選べる。
- ・ 卒業研究/論文：探究成果を**まとめる**（リサーチ・デザイン）
- ・ 研究を他者に語る：自らを伝える力を**確かめる**  
(発信・対話能力)

→総合人間学の実践としてのプログラム

KYOTO UNIVERSITY

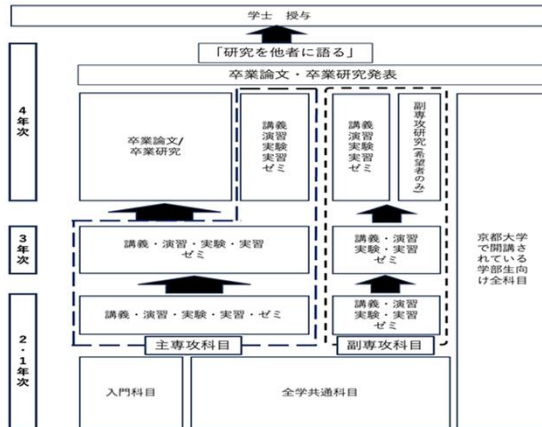


京都大学



2025年10月24日（金）外部評価委員会

### 総合人間学部コースツリー



- 1.総合人間学部が提供する学際的な学問の場において、**人文科学・社会科学・自然科学を横断する幅広い知識と教養**を身につけていること。
- 2.他者や異文化に対する理解を深めた上で、自らの見解を形成し、それを**他者に伝える豊かなプレゼンテーション能力**とコミュニケーション能力、人々の意見をまとめるリーダーシップを培っていること。
- 3.多様な学問分野を学ぶ中で、自らの知的な核となる**特定の専門分野を選択**し、その理解を深めていること。
- 4.主たる専門分野とは異なる、**もう一つの分野も系統的に学ぶ**ことによって、人間・文明・自然に対する、多角的な視点や柔軟な発想力を培っていること。
- 5.卒業論文・卒業研究において、問題の設定からその解決方法の提示に至る研究過程に取り組み、一定の成果を上げていること。

京都大学で開講されている学部生向け全科目

京都大学



KYOTO UNIVERSITY

2025年10月24日（金）外部評価委員会

## 卒業に必要な単位 = 140単位, 4年間在学

科目	詳細	単位
主専攻科目	全学に開放された専門科目を含む	46
	卒業論文／卒業研究	12
	研究を他者に語る（別頁で説明）	
副専攻科目	全学共通科目を含む	20
入門科目		6
外国語科目		24
自由科目	京大で学部向けに開講されている全科目(他学部の科目もOK) 教職・資格取得に必要な科目に例外あり	32

※留学により修得した科目も単位認定可能です。

KYOTO UNIVERSITY

京都大学



7

2025年10月24日（金）外部評価委員会

## 履修について

- 入試の区分（一般入試文/理・特色入試）による制限は一切ありません。

多様な学問分野から主専攻と副専攻を選択することができます。

KYOTO UNIVERSITY

京都大学



8

2025年10月24日（金）外部評価委員会

## 入門科目について

1回生の間に「入門科目」の履修によって、さまざまな研究分野や専門領域についての視野を拡げるとともに、総合人間学部の各教員の研究活動をよく観察して、主専攻となり得る専門領域（講座）が自分の興味や関心事に合うかを吟味します。

KYOTO UNIVERSITY

京都大学



9

2025年10月24日（金）外部評価委員会

## 総人ゼミについて

担当の教員・大学院生と直接に少人数で学ぶことができます。

単位にはなりません、その分自由度が大きく、特別な経験をすることができる場合もあります。

KYOTO UNIVERSITY

京都大学



10

2025年10月24日（金）外部評価委員会

## 主専攻について

### 主専攻選択＝分属

2 回生進級時に所属したい講座を10講座の中から選択します。

- 1 回生 9 月末 講座分属説明会
- 1 回生 1 月 分属届を提出（2 回生から講座所属）  
教員アドバイザーを選ぶ（原則，所属講座から）
- 3 回生 7 月 指導教員届を提出  
主専攻・所属研究室決定  
教員一人当たり学生3名まで（目安）  
2 回生進級時に選んだ講座の変更も可能
- 4 回生 1 月 卒業論文・卒業研究提出

KYOTO UNIVERSITY

京都大学



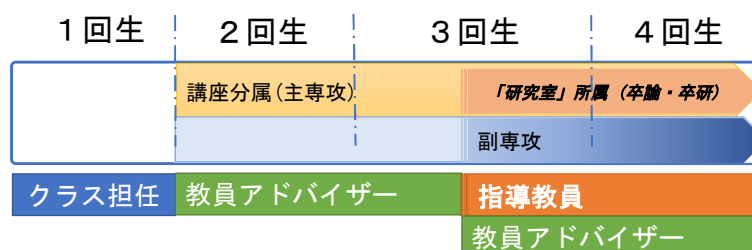
11

2025年10月24日（金）外部評価委員会

## 副専攻について

主専攻以外の講座から1つを選びます。

3 回生7月に副専攻の届出をします。



KYOTO UNIVERSITY

京都大学



12

12

2025年10月24日（金）外部評価委員会

## 主専攻・副専攻の履修について

主専攻＝講座	副専攻
1 数理・情報科学講座	
2 人間・社会・思想講座	
3 芸術文化講座	
4 認知・行動・健康科学講座	
5 言語科学講座	主専攻講座以外の1講座 (副専攻) から20単位
6 東アジア文明講座	
7 共生世界講座	
8 文化・地域環境講座	
9 物質科学講座	
10 地球・生命環境講座	

1つの講座(主専攻)から46単位

KYOTO UNIVERSITY

京都大学



13

2025年10月24日（金）外部評価委員会

## 「研究を他者に語る」について

卒業論文・卒業研究発表会の後に、専門分野の異なる

「他者」に自分の研究を語るイベントです。

自分の研究を相対化し客観化することで、より総合的な視点から物事を観る能力が培われます。

卒業要件となっています。



KYOTO UNIVERSITY

京都大学



14

2025年10月24日（金）外部評価委員会

## GXとの接続

- ・ グリーントランスフォーメーション（GX）
- ・ 脱炭素技術＋社会全体の価値観転換
- ・ 技術や制度だけでは持続可能な社会は築けない
- ・ 必ず生じる軋轢、対立
- ・ 価値観の変革を支える人材が不可欠
- ・ 総合人間学部の理念＝GXを支え、捉え直す基盤
- ・ 未来を描く力が必要な局面にある

KYOTO UNIVERSITY



京都大学



15

2025年10月24日（金）外部評価委員会

## 未来へのビジョン

- ・ この星に生きるすべての生命が共に生きる未来
- ・ 総合人間学部は「知の拠点」として貢献
- ・ 教育・研究・社会との連携を通じて
- ・ 持続可能な社会変革を支える

KYOTO UNIVERSITY



京都大学

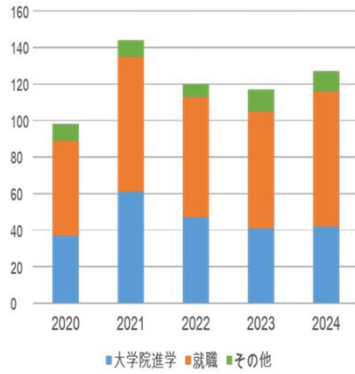


16

2025年10月24日（金）外部評価委員会

## 卒業後の進路

進路別卒業生数



**3~4割が大学院進学**

(主に、人間・環境学研究科)

<2024年度就職先>

楽天、野村証券、レバレジーズ、NTTドコモ、コーエーテクモホールディングス、KPMGコンサルティング、サンリオ、電通、博報堂、三菱自動車工業、大成建設、日鉄ソリューションズ、JTB総合研究所、ウェザーニューズ、シグマックス、三井住友信託銀行、国際協力銀行、PwCコンサルティング合同会社、経済産業省、国土交通省、財務省 近畿財務局、大阪地方裁判所、大津地方裁判所など

京都大学




KYOTO UNIVERSITY

③人間・環境学研究科 大学院教育における特色ある取り組み

人間・環境学研究科  
大学院教育における特色ある取り組み

京都大学

人間・環境学研究科  
大学院教務委員長 神崎 素樹



KYOTO UNIVERSITY

1

人間・環境学研究科 大学院教育における特色ある取り組み

2025/10/24 外部評価委員会

人間・環境学研究科が想定する修了者の人物像

- ・教養科目を担当する大学教員として学際知を領域外の他者にわかりやすく伝達する人物
- ・人文・社会科学と自然科学の融合による新学術領域創成の要となる人物
- ・産業界、行政組織において学際的専門知と現場を架橋して社会課題の解決に貢献する人物
- ・海外大学や国際組織において異なる文化圏・言語圏の人々に学際知を伝える人物

（令和5年度改組時 設置報告書より）

↓  
学生個々のニーズに基づき指導教員に加え、学術越境センターが支援

修士課程/博士後期課程において必修の取組として

→ 大学院教育における特色ある取り組み

- ① 研究を他者と語る（修士課程）
- ② 教養教育実習/学際研究演習（博士後期課程）
- + α ③ 課題研究レポート（修士課程・博士後期課程） について、ご紹介します。

KYOTO UNIVERSITY

2

## 人間・環境学研究科 大学院教育における特色ある取り組み

2025/10/24 外部評価委員会

### ① 研究を他者と語る（修士課程）

#### 【人間・環境学研究科 教育研究上の目的】

人間・環境学研究科は、環境、自然、人間、文明、文化を対象とする幅広い学問分野の越境を通して、人間と環境のあり方についての根源的な理解を深めるとともに、近い将来だけではなく遠い未来をも見据えた先駆的研究の推進、教育研究における国際連携の強化、自然科学・人文科学・社会科学の垣根を越えた総合的な産学官連携に資する研究と教育によって、人間及び環境の問題に対して広い視野と高度な知識、高い倫理性と強い責任感をもって取り組むことのできる研究者、指導者、実務者を養成することを目的としています。

この「学問分野の越境（学術越境）」を進めるためのカリキュラムの一つとして

修士課程の大学院生全員が参加する「教養知科目」として設定されるのが「研究を他者と語る」

#### 【学部の「研究を他者」に「語る」と何が違う？】

「研究を他者と語る」では、専門を共有しない他者に専門学術を伝える力としての教養知の涵養を目指し、専門の異なる大学院生とお互いの研究についての議論を深めることで、狭い専門分野に閉じることなく、自身の専門知を相対化できる広い学際知を備えることを目的としています。そのため、学部生を対象とする「研究を他者に語る」よりも専門的な内容に踏み込んで議論することが求められる一方で、異分野の大学院生の間でのディスカッションを行うため、専門用語等の丁寧な解説も必要になり、それらを両立するスキルが求められます。

KYOTO UNIVERSITY

3

## 人間・環境学研究科 大学院教育における特色ある取り組み

2025/10/24 外部評価委員会

### ① 研究を他者と語る（修士課程）

【修士課程 修了に必要な単位数】 修士課程では「研究を他者と語る」以外にも…

科目区分	履修区分	単位数	備考
【研究指導科目】			
「人間・環境学研究Ⅰ」	必修	4	1回生配当
「人間・環境学研究Ⅱ」	必修	4	2回生配当
【教養知科目】			
「研究を他者と語る」	必修	1	2回生配当
【学際知科目】			
自講座開設の学際知科目	選択必修	8以上	
他講座開設の学際知科目	選択	10以内	特別科目、大学院共通・横断教育科目（「研究倫理・研究公正」以外）、他研究科・他大学（国内外）で取得した科目も含む(*)。
【学術越境科目】			
「学術越境基礎1～10」	選択必修	2	所属する講座に関連した科目以外から履修することを推奨する。2単位を超える分は増加単位として扱う。
「学術越境研究計画1,2」	選択		自身の専門領域以外の学習も支援することで自身の専門知を相対化できる広い学際知を備える
【研究公正科目】			
「研究公正チュートリアル」	必修	0.5	
「研究倫理・研究公正」	必修	0.5	大学院共通科目として開講
合計		30以上	4月・10月の履修登録による

4

## 人間・環境学研究科 大学院教育における特色ある取り組み

2025/10/24 外部評価委員会

### ① 研究を他者と語る（修士課程）

#### 【授業の概要・目的】 ※シラバスより

「研究を他者と語る」は、専門を共有しない他者に**専門学術を伝える力としての教養知の涵養**を目指し、**専門の異なる大学院生とお互いの研究についての議論を深める**ことで、狭い専門分野に閉じることなく、**自身の専門知を相対化できる広い学際知を備える**ことを目的とする。

#### 【グループディスカッションの内容詳細】

- 異なる講座に属する大学院生5名程度がグループとなり、専門的知見を他の分野の大学院生と議論をする。一人当たりの持ち時間を30分目安とし、1グループあたり総時間150分で実施する。実施は2日間に分けても良いし、途中で休憩を入れて実施することも可能とする。
- 参加者は自らの発表を行う他に、**自分以外の参加者1名の発表に対しての指定質問者の役割も担う**。各発表に関する議論は指定質問者の質問を皮切りにして進める。

自身の研究を他者に伝える力だけでなく、  
専門の異なる分野について対話により理解する力も求める

KYOTO UNIVERSITY

5

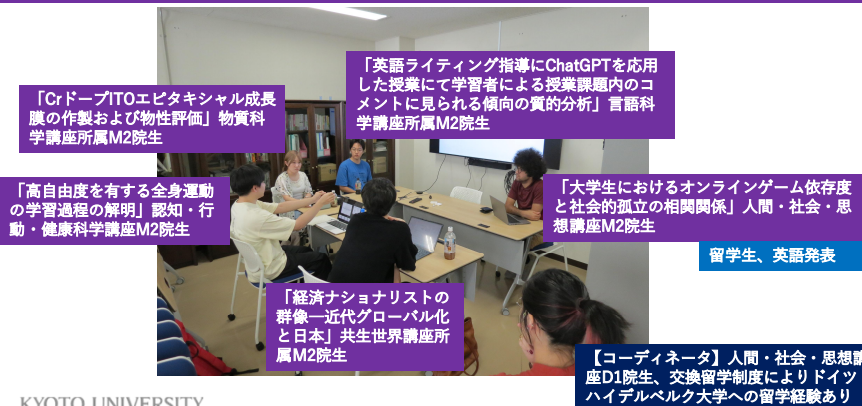
## 人間・環境学研究科 大学院教育における特色ある取り組み

2025/10/24 外部評価委員会

### ① 研究を他者と語る 実施例(2024年度グループ10、M2院生5名、D1院生コーディネータ1名)

#### 発表タイトル

- 「CrドープITOエピタキシャル成長膜の作製および物性評価」物質科学講座所属M2院生
- 「経済ナショナリストの群像—近代グローバル化と日本」共生世界講座所属M2院生
- 「英語ライティング指導にChatGPTを応用した授業にて学習者による授業課題内のコメントに見られる傾向の質的分析」言語科学講座所属M2院生
- 「大学生におけるオンラインゲーム依存度と社会的孤立の相関関係」人間・社会・思想講座所属M2院生、留学生、英語発表
- 「高自由度を有する全身運動の学習過程の解明」認知・行動・健康科学講座所属M2院生
- 【コーディネータ】人間・社会・思想講座D1院生、交換留学制度によりドイツ・ハイデルベルク大学への留学経験あり



KYOTO UNIVERSITY

6

## 人間・環境学研究所 大学院教育における特色ある取り組み

2025/10/24 外部評価委員会

### ① 研究を他者と語る 実施例(2024年度グループ10、M2院生5名、D1院生コーディネータ1名)

#### 指定質問者/責任討論者によるコメント

- ・物質科学講座所属M2院生⇒認知・行動・健康科学講座M2院生
- ・共生世界講座所属M2院生⇒言語科学講座M2院生
- ・言語科学講座M2院生⇒人間・社会・思想講座M2院生
- ・人間・社会・思想講座M2院生⇒物質科学講座所属M2院生
- ・認知・行動・健康科学講座M2院生⇒共生世界講座所属M2院生

「英語ライティング指導にChatGPTを応用した授業にて学習者による授業課題内のコメントに見られる傾向の質的分析」言語科学講座学生

他のメンバーに率先して質問を行う事で発表者の研究の面白さと奥深さを探れるように努めた。自分の指摘に対して「実はそこは自分も悩んでまして」と相手の研究の核心的なところを突けたのが良かったと思う。

「CrドープITOエピタキシャル成長膜の作製および物性評価」物質科学講座所属M2院生

事前準備として、抄録に書かれている専門用語を調べて理解しておくようにした。実験方法を熟読し、実験の流れを把握した。当日はそれぞれの試行の具体的な条件やその試行を行う理由を質問した。この質問によって実験の意義が明確に分かるようになり、活発な議論を行うきっかけになったと感じた。

「高自由度を有する全身運動の学習過程の解明」認知・行動・健康科学講座M2院生

「経済ナショナリストの群像—近代グローバル化と日本」共生世界講座所属M2院生

「大学生におけるオンラインゲーム依存度と社会的孤立の相関関係」人間・社会・思想講座M2院生、留学生、英語発表

まず発表者の分野が自分と違いすぎて、抄録を読んでも内容を把握できなかったため、化学で使われる用語を勉強しておいて、質問を用意するときにも、あえて社会科学の観点から質問をした。発表者が今まで自分の分野から数多くの意見を聞いているはずなので、違う観点からの質問で発表者の視野が広がるし、面白がると思ったからである。

KYOTO UNIVERSITY

7

## 人間・環境学研究所 大学院教育における特色ある取り組み

2025/10/24 外部評価委員会

### ① 研究を他者と語る 実施例(2024年度グループ10、M2院生5名、D1院生コーディネータ1名)

#### 討論全体から学んだこと

「CrドープITOエピタキシャル成長膜の作製および物性評価」物質科学講座所属M2院生

今回、他分野を専攻する方の発表を聞いて、自分の専門分野との共通点や相違点を探すことで多くのことを学んだ。発表者の一人は、自分の研究で明らかにできることと、できないことを発表中に言及していた。明らかにできないことまで言及していることは意外だったが、それによって研究の方向性が明確になっているような印象を受けた。この考え方は自身の研究に対しても参考にしたいと考えている。

「高自由度を有する全身運動の学習過程の解明」認知・行動・健康科学講座M2院生

第一に学んだことは、同じ研究科においても分野や研究方法が全く違うということである。全く違うことを研究していて、どれも新鮮で興味深い内容ばかりだった。また、同じ世界ばかりからものを見ず、さまざまな視点から見る機会を得ることは重要なことだと感じた。

「経済ナショナリストの群像—近代グローバル化と日本」共生世界講座所属M2院生

理系は研究成果を出す期限が明確にあり、それは科研費など研究費に制約を与えていることがわかり面白かった。

「英語ライティング指導にChatGPTを応用した授業にて学習者による授業課題内のコメントに見られる傾向の質的分析」言語科学講座学生

討論全体から学んだ事としては、ほぼ予備知識のない他人の研究分野であっても自分なりに質問を考える事で建設的に議論を展開できるのだと気づいた。総じて、この「研究を他者と語る」の試みは非常に興味深いものであった。ぜひとも来年以降も実施して欲しいと思う。

「大学生におけるオンラインゲーム依存度と社会的孤立の相関関係」人間・社会・思想講座M2院生、留学生、英語発表

同じ「科学」という幅広い分野でも、やり方には多様性があることを実感できた。例えば自分と経済学を勉強しているメンバーの質問が主に理論的なところについてであったのに対して、実験をしている他の2人のメンバーの質問が主に実証的なところについてだった。

コーディネータ：人間・社会・思想講座D1院生、交換留学制度によりドイツ・ハイデルベルク大学への留学経験あり

全体として、他分野にも関心を持っている学生、他分野に対してどのような前提知識を補うべきかがある程度わかっていてスムーズに進行することができた。そのため、会全体でスムーズに進行することができた。留学生も、言語的障壁を感じさせないように場面はほとんど感じなかったし、日本語の表現や日本に対しての考え方に對して、当人含め、どの学生も差別的であつたり問題があるように感じられる危うい発言をせずに進行することができていた。

KYOTO UNIVERSITY

8

② 教養教育実習/学際研究演習 (博士後期課程)

【授業の概要・目的】 ※シラバスより

教養教育実習

教養教育のできる人物の育成を目指すもので、大学の初学者に対して教鞭を取るにあたって必要な教育能力・教育経験を獲得させる。授業のデザイン・実施に関する基礎的な知識・技能を習得する。指導教員による授業見学、事前教育ののち、指導教員の監督のもと、原則、指導教員が担当する総合人間学部入門科目もしくは全学共通科目の授業1回を担当し、講評をうける。

学際研究演習

初学者や一般の人々、あるいは他の研究領域の研究者に自らの研究内容をわかりやすく伝えることができる専門家の育成を目的とする。自らの研究内容をわかりやすく伝えるための技能演習をしたうえで、初学者あるいは研究領域の異なる研究者を主とする聴衆に対して自らの研究内容を説明する。

※ 博士後期課程においていずれか1科目必修

※ 両科目共に実際の授業担当/研究内容説明前の事前教育の受講が必要

KYOTO UNIVERSITY

9

② 教養教育実習/学際研究演習 (博士後期課程)

【学生からの声】

教養教育実習

・このような経験を通じて、教育の重要性を深く理解し、将来の教育活動に対するモチベーションが一層高まった。今後は、身につけた知識を研究などに応用し、さらに深めていくことで、教育界への貢献を積極的に行っていきたいと考えている。

・知識を共有する楽しさを実感しました。私が教壇の上で学生を見るたびに、多くの学生がこちらに注意を払ってアイコンタクトをとれることが印象的です。そして、私は普段から使命感を持って、教育の重要性を知っていますが、授業を教える楽しさを感じるのは初めてでした。

・反省点はあるものの、全体として上手く進行できたと思う。学生の反応が授業の展開に大きな影響を与えるということは新発見であった。今回得た実感は今後に授業を行う際に役立つだろうと考える。

・初学者に対して学問の面白さや、学知をわかりやすく伝えるためには、受講生の状況をよく知ること、そして教材研究が非常に大切であることを学んだ。

・教員も学生も積極的に授業に取り組む必要のあるデザインにすることの授業をする側に対するメリットがよく理解できた。また授業後に追加で学生に質問をもらえ、授業内容についてディスカッションを行うことができたことも非常に良い経験であった。

・授業を受け持つには、研究と並行して、自分の研究分野・学問分野に関連のある周辺知識も身につけていかなければならないと痛感した。実際に自分が仕事として授業を受け持つ際には、今回の反省点を踏まえた上で、授業デザインを組み立てていきたいと考えている。

・今回の教養教育実習を通して、講義という前提知識のない学生を対象に知識を伝える場面において知識を伝える責任を認識し、学会・研究会の発表とは異なる視点からの工夫・配慮を多分に習得できた。今回得た知識・経験は講義場に留まるものではなく、初学者に研究で得た知識を伝える様々なアウトリーチ活動にも適用され得るだろう。自身の研究分野では、特に研究で得た成果を広く一般の人々や、対象とした患者の方々に伝えることが重要だと想定しているため、本実習を通しての一連の経験はこれからの研究活動に資するものになったと感じている。今後は今回の経験を実際の研究活動でも活用し、さらに自分なりに深化させたい。

KYOTO UNIVERSITY

10

② 教養教育実習/学際研究演習 (博士後期課程)

【学生からの声】

学際研究演習

・多様な視点からのフィードバックを通じて、**自分の研究の位置づけと意義が一層明確になり、今後の研究に向けた新たな視点も得ることができた。**最後に、他の参加者である方々からのフィードバックを通じて、彼ら・彼女らも多くのことを学んだという意見をいただいた。これにより、**学際研究演習は、研究の社会的価値を広めるという観点でも、学問的な深化と学際的な交流を促進する場としても、非常に意義のある活動であったと感じている。**

・自分の問題意識を、現代のアクチュアルな状況に関係づける形で捉え返すことができた。

・生徒の皆さんからいただいた質問は、非常に鋭い理論に関する疑問から自身に引き付けて考えてくださったものに至るまで幅広く、60分間という長い時間にも関わらず集中して聞き、考えてくれたのだと感じました。皆さんの真摯に考える姿勢を見て、自身の研究に非常に良い刺激をいただけたと思います。

・今回は、一コマの授業を担当し、責任をもって講義を行うという初めての経験であったため、多少至らないところがあったかもしれないと思うが、発表をどのように準備しようかと考えること、また受講者からの質問に答えるために考えることで、**他人にいろいろな情報や知識を伝えるだけでなく、自分の中の学びや発見も深まるということ**を、身をもって学ぶことが出来た。

・発表後は、自分とは専門が異なる研究者からもコメントをいただき、自分の研究を深めていく上でのヒントを得た。本実習を通して、**研究をわかりやすく解説する技術を習得し実践するとともに、自身の研究理解も深めることができた。**

・今回の体験は、**自身の研究が社会的にどのような立場にあり、研究を社会に還元するためにはどのような工夫が必要であるかを考えるきっかけになった。**また、学びコーディネーター事業に興味を持ってくださった高等学校の先生方のような教育に携わる方々との交流が研究と社会を繋げる一端となっていることを実感した。そのため、今後もこのような活動を続けていきたいと思う。

・学際研究演習を通じて、自分の研究の学術的意義だけでなく、その社会的意義も非常に重要であり、そしてどのように自分の研究を分かりやすく一般者に伝えるかというのは研究成果の社会への還元において重視すべきことだという認識を深めた。

KYOTO UNIVERSITY

11

③ 課題研究レポート

【VII. 研究指導について】 ※学生便覧より

(1) 課題研究レポートについて

- ・修士課程及び博士後期課程学生は、研究の目標をより明確にし、その進捗を確認しながら、論文執筆に向けて研究を進めるため、毎年度、課題研究レポートを作成し、提出しなければならない。
- ・年度当初に指導教員の指導のもと、研究題目、研究計画を策定し、年度末にその達成度を評価する。

【教員の声】

- ・指導学生が研究以外のなにを求めているか？通常の研究室ミーティングでは聞けないことがわかる。
- ・学生の研究だけでなく、生活の悩みなどを知ることができ、アドバイザー教員に早めに相談することができた。

【教務委員長】

- ・指導教員と学生のコミュニケーションの全体像を把握することが出来る。

KYOTO UNIVERSITY

12

④学術越境センター

学術越境センター

人間・環境学研究科  
附属学術越境センター長 齋木 潤

京都大学



KYOTO UNIVERSITY

1

学術越境とは何か

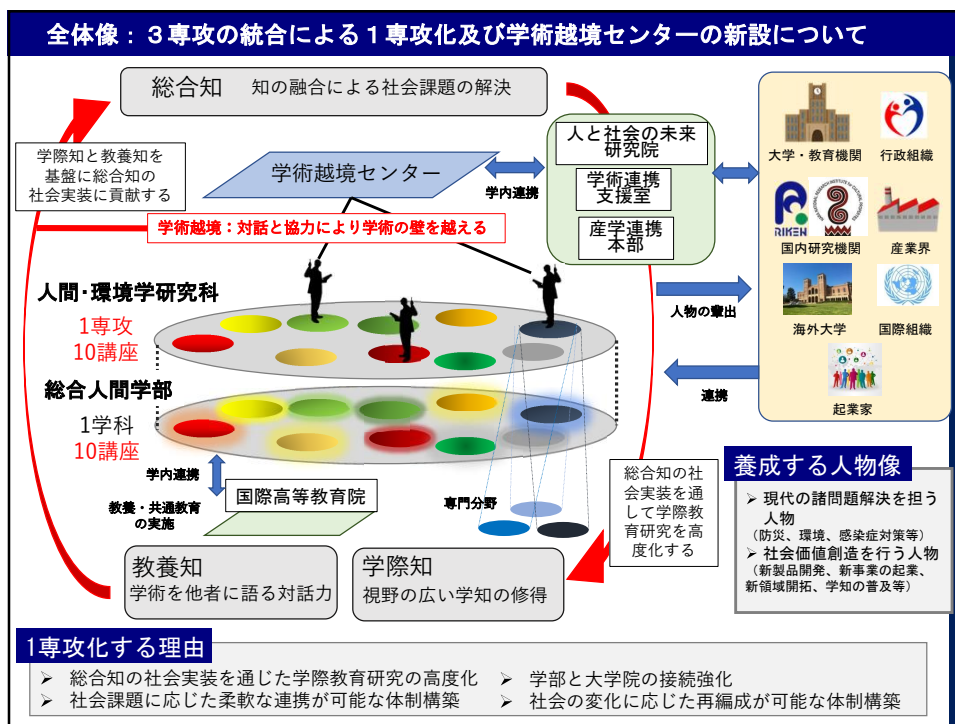
研究科の目標

教養知を基盤とした**学術架橋力**を備え「総合知」の創出と活用に貢献できる人物の育成

- 学術架橋力：学術分野間、学術と社会を架橋する力
  - 教養知の涵養：学術を他者に語る対話力
  - 学際知の深化：視野の広い学知
  - **学術越境**経験：専門をまたぐ分野間連携実践
- 学術越境：自身の専門を基盤に他の分野と連携する
  - 学術分野間連携
  - 産業界、行政との連携
  - 国際連携

KYOTO UNIVERSITY

2



3

## 学術越境センターの目的と組織

**目的**

- 自身の高い専門性と他分野の最先端の知を架橋する力 (学術架橋力) を醸成する。
- 学生の学術越境志向をエンカレッジする。
- 特に、博士後期課程学生に対するサポート体制を充実させる。
- 学生のOJT環境 (インターン・海外留学など) を強化する。

**センター長**  
齋木 潤 教授 (役職指定：副研究科長)

**専任教員**  
縄田浩志 教授  
田代 藍 特定准教授

**兼任教員 (講師：若手重点戦略定員)**  
浅沼 尚 講師

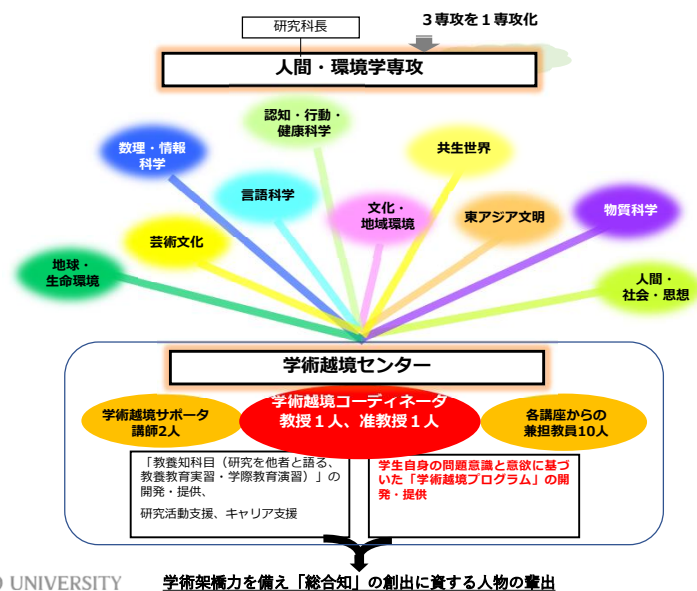
**兼任教員 (講座選出)**  
ディブレクト マッシュー 准教授  
松本卓也 准教授  
田口かおり 准教授  
萩生翔大 准教授  
堀口大樹 准教授  
津本 陽 准教授  
バッテ パツラヴィ 講師  
前田昌弘 准教授  
廣戸 聡 准教授  
土屋 徹 准教授

**事務担当**  
宮崎まどか

KYOTO UNIVERSITY

4

## 学術越境センターの位置づけと役割



5

## 主な事業

- 学術越境プログラム
  - ◆ Phase 1 (修士課程院生向け)
  - ◆ Phase 2 (博士後期課程院生向け)
  - ◆ 学術越境研究計画
- Field Encounter
- 学術越境フォーラム
- 「研究を他者と語る」

KYOTO UNIVERSITY

6

# 学術越境プログラム：目的と概要

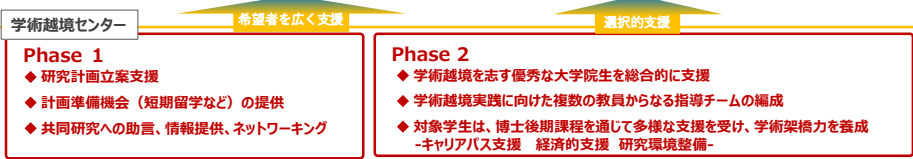
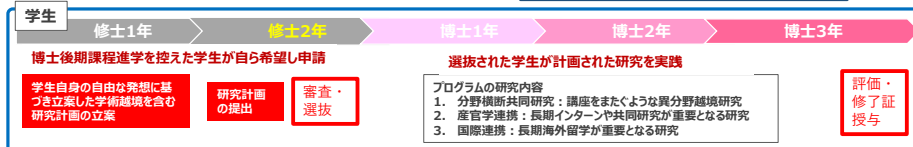
## 学術越境プログラムの目的

学内外教育組織・支援組織と連携しつつ、人社系と理系研究の融合を加速し、**教養知を基盤とした「学術架橋力」**を備え、将来、Society5.0に求められる人文・社会科学と自然科学の知を融合した**「総合知」**の創出と活用に**貢献**できる人物を輩出

**特色** 学生自身の問題意識と意欲に基づき、教員との対話を通じて学術架橋力を修得する新しい学際教育のモデル

→

- ・修士課程（研究計画立案時）：Phase 1  
多様な準備機会の提供
- ・博士後期課程（研究実践時）：Phase 2  
研究の実現に向けた多様な支援



7

## Phase 1 支援プログラム

- ・ 対象：博士後期課程進学を計画している修士1回生
- ・ 支援期間：M1後期－M2後期
- ・ 支援内容：研究計画立案のための準備的活動
  - ・ 長期海外留学を見据えた短期の海外渡航
  - ・ 長期の企業インターンを踏まえた短期のインターン
  - ・ 分野横断共同研究を展開するための準備的な研究打ち合わせ、予備調査
- ・ 支援額：30万円程度
- ・ 採択数：各学年10件程度
  - ・ 2023年度実績：13件を採択（M1：8件、M2：5件）、応募13件
  - ・ 2024年度実績：10件を採択、応募10件
- ・ 活動内容：
  - ・ 外国の研究機関の訪問
  - ・ 外国での資料収集
  - ・ 国内の研究所での共同研究
  - ・ 国内学会への参加、成果発表、資料収集
  - ・ 研究のための資料（書籍、実験機材）の購入

KYOTO UNIVERSITY

8

## Phase 2 支援プログラム

- 対象：博士後期課程院生
- 支援内容：
  - 博士後期課程における生活費支援（支援機構プログラムを利用）、
  - 学術越境研究活動実践の経済的支援、
  - 指導チームの編成による研究支援
- 支援額：博士後期課程3年間で総額150万円程度
- 採択数：各年度3名程度
  - 2023年度実績：4名を採択（応募者は9名）
  - 2024年度実績：4名を採択（応募者は5名）
- 採択研究テーマ：
  - 「役を演じる」実践と、高齢者の老後の生きがいに関する人類学的研究
  - 気候変動による製塩・宗教実践の変容をめぐる民族誌：インドネシアの天日製塩を事例に
  - データの視覚認知メカニズムの解明とデータ可視化の効果的な活用に向けた方略の検討
  - 近現代中国の精神障害者と優生学・脱施設化——歴史学と精神医学からの学際的アプローチ
  - サードセクターとしての子ども食堂の自律性：制度ロジックの質的分析
  - 仕事上の意思決定における個別情報と要約情報の相互作用の検討
  - Development and Validation of Web-based Pragmatic Competence Test for Chinese Learners of Japanese

9

## 学術越境研究計画Ⅱ

### 授業の概要と目的

学術越境プログラムPhase1, Phase2への応募を検討している修士院生を対象に研究計画立案のサポートを行う

#### 学術越境研究計画Ⅰ（M1向け）

#### 授業の概要と目的

フィールド体験実習、学術越境研究活動の紹介、ディスカッションを通じて修士2回時の学術越境研究計画を立案する

#### 学術越境研究計画Ⅱ（M2向け）

研究計画や実践を共有し、ディスカッションを通じて博士後期課程における学術越境研究計画を立案する

#### 到達目標

博士後期課程の研究の準備的活動となる学術越境プログラムPhase1の研究計画を立案する

自身の問題意識に基づく学術越境活動を構想し博士後期課程で実施する研究計画を策定する

#### 授業内容

- フィールド体験実習（Field encounter）への参加
- Phase1受給者（M2学生）の研究紹介
- 履修者同士の研究計画の紹介とディスカッション

- 研究計画立案ワークショップ
- Phase2受給者（博士後期学生）の研究紹介
- 自身の研究計画の発表とディスカッション
- 越境ゼミ（Phase2受給者とのディスカッション）

KYOTO UNIVERSITY

10

## Field Encounter : 研究現場との出会いを創出する

**Field Encounterの狙い**

まずは、「体験してみる」  
フィールド体験+専門の異なる他者とのディスカッション=自身の研究のヒント

活動内容	Fieldの実施状況
<ul style="list-style-type: none"> <li>研究現場の体験</li> <li>専門家からの情報収集</li> <li>多様な専門を持つ学生間のディスカッション</li> <li>プログラム立案のヒントとする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>フィールド研：自然環境保全研究（芦生）</li> <li>人文研：歴史研究の一次資料（尼崎）</li> <li>ふじのくにミュージアム：アウトリーチ（静岡）</li> <li>いくのパーク：多文化共生（大阪）</li> </ul>

**将来像**

- プログラムへの参加をきっかけとした研究プログラムへの発展
- 学生同士のネットワーキングの機会
- 他部局、学外の研究者、実務家とのネットワーキングの機会
- 学生が主体となったfieldの創出

KYOTO UNIVERSITY

学術越境プログラムでの位置づけ

- 学術越境研究計画Ⅰの授業のrequirement
- 人数に余裕がある限り、学術越境研究計画Ⅱからの参加可能
- 定員に達しなければ、人環、総人の学生にも開放

11

## 学術越境フォーラム：キャリア形成へのモラルサポート

**キャリア形成における不安への対処**

自身の専門だけで精一杯なのに学術越境研究などして良いの？  
学術越境研究を実践してきた先駆者たちの話を聞いてみよう  
アカデミックな研究の話だけでなく、キャリア形成における苦労話、喜びを語ってもらい、学生の背中を押す

学術越境フォーラムの狙い	フォーラムの実施形態
<ul style="list-style-type: none"> <li>学術越境研究の実態を知る</li> <li>キャリア形成における課題や心構えを共有</li> <li>学術越境研究の意義ややり甲斐を伝えてもらう</li> <li>ネットワーキングの機会を提供する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>月末金曜日5限に固定</li> <li>講演+ディスカッションと情報交換会（懇親会）</li> <li>教員、院生、学部生全てに公開</li> <li>センター教員による自主企画</li> </ul>

**これまでに実施したフォーラムから（2025年4月～）**

大学教員、環境学研究所 総合地球環境学研究所 学術越境フォーラム第2回  
2025年5月30日（金）5限 16:45～18:15  
京都大学吉田南構内 人環・環境学研究所棟(Na.8-9)4階433室

**最新の流行語「超学際性」を考える**  
— 越境とは何か？越境は実践に結びつくか？ —  
Transdisciplinarity, the latest buzzword?  
What boundary crossing means and how it works in practice

講演者  
リーヤ・ランビーノ (Ria Lambino, PhD)  
総合地球環境学研究所 フューチャー・アース・センター  
一長 (Director, Future Earth Centre; Research Institute for Humanity and Nature)

講演者のコメント  
超学際性(トランスディシプリナリティ)は、研究、政策、実践においてますます重要視されているが、それは単なる学際的アプローチから本質的には、専門領域の境界にとどまらず、研究、実践、コミュニケーションの場を越えて、異なる学問領域の境界に取組み、協働して研究を進めることの本質の理解を促す。実践社会での実践を通じて、超学際研究の意義と進め方を理解し、自分が超学際研究の発展に貢献するのめざす。学問的、社会的、知識的、倫理的、実践的、政策的な重要な関わりを支える条件をどのように整えるかについて議論します。このようなアプローチに取り組むためのスキルやコンピテンシーについても議論します。

**第2回 (5/30)**  
リーヤ・ランビーノ  
（総合地球環境学研究所）

**学術越境フォーラム第3回**  
2025年6月27日（金）5限 16:45～18:15  
京都大学吉田南構内 人環・環境学研究所棟(Na.8-9)4階433室

**人とモノを繋ぐ仕事～博物館におけるこれまでの研究活動を振り返って～**  
Connecting People and Objects: Reflections on My Research Activities at Museums

「博物館」は、多岐にわたる学問領域を統合し、展示、研究、教育活動を通じて社会とつながり、歴史を伝える重要な役割を果たしている。博物館は、単に過去の遺産を保存するだけでなく、現代社会の課題を問いかけ、未来を創出するためのプラットフォームとして機能している。本講演では、博物館の学問的・社会的役割について、これまでの研究活動を通じて学んだことを振り返り、博物館における学問的・社会的活動の重要性について、具体的な事例を通じて議論する。

講演者  
井上 卓哉 Tokuyasu Inoue  
静岡県富士山世界遺産センター 学芸員 博物館  
Associate Professor, Mt. Fuji World Heritage Centre, Shizuoka

井上 卓哉 先生は、2004年に総合地球環境学研究所に所属し、2006年に総合地球環境学研究所で博士号を取得。2008年に総合地球環境学研究所で准教授、2010年に総合地球環境学研究所で教授に就任。2012年に総合地球環境学研究所で学芸員に就任。2022年より現職。

**第3回 (6/27)** 井上 卓哉  
（静岡県富士山世界遺産センター）

12

⑤京都大学大学院人間・環境学研究科の研究面での取り組み

**京都大学大学院人間・環境学研究科の  
研究面での取り組み**

令和7年10月24日 外部評価委員会

大学院人間・環境学研究科  
研究科長 宮下 英明

京都大学



KYOTO UNIVERSITY

1

**大学院人間・環境学研究科の研究面での取り組み**

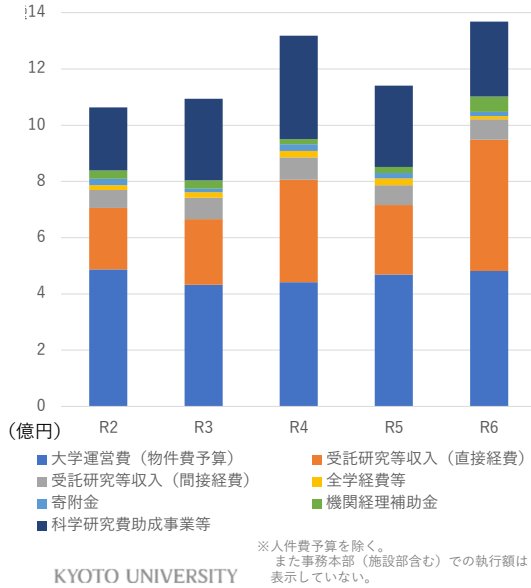
<b>研究の実施体制の充実</b>	<b>R2-R6 5年間</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>外国人客員教員の招へい (3~6ヶ月) 16名</li><li>招へい外国人学者の受入 31名</li><li>外国人共同研究者の受入 17名</li><li>日本学術振興会特別研究員の受入 74名</li><li>特定教員の採用 R2-R6 P:1名, AP:3名, L:1名, AP:4名</li><li>「白眉プロジェクト」研究者の受入れ 3名</li><li>共同研究員の受入 8名</li><li>若手重点戦略定員の活用 2名</li></ul>	
<ul style="list-style-type: none"><li>学術越境センターの設置 専任教員2名 (R6)</li><li>学術越境プロジェクトの実施 4プロジェクト (R6)</li><li>研究科横断型研究教育ユニットに参画 R5:10件 R6:6件</li></ul>	

KYOTO UNIVERSITY

2

大学院人間・環境学研究科の研究面での取り組み

大学運営費及び外部資金の獲得状況

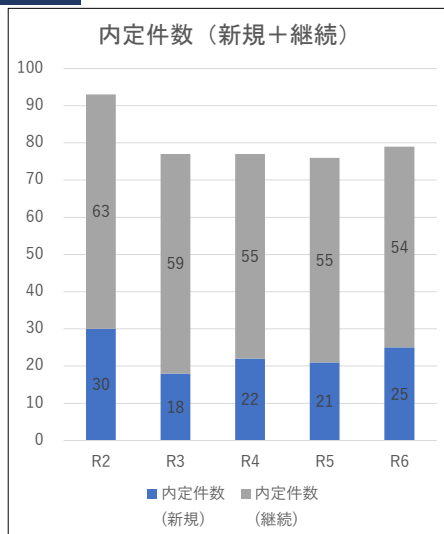
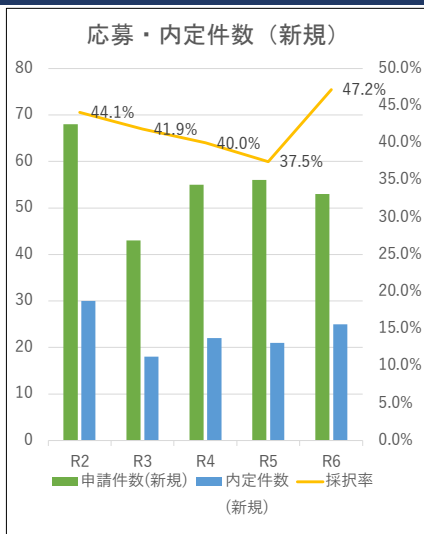


令和2-6年度  
 大学運営費(物件費)  
 4.3-4.9 億円/年度  
 受託研究費  
 (直接+間接経費)  
 2.7-5.4 億円/年度  
 科学研究費補助金  
 2.7-3.7 億円/年度  
 外部資金等全体  
 5.7-7.6 億円/年度  
 学生が取得した補助金等は未算入

3

大学院人間・環境学研究科の研究面での取り組み

科学研究費助成事業受入状況



KYOTO UNIVERSITY

4

## 大学院人間・環境学研究科の研究面での特色ある取り組み

### 研究支援：若手研究者出版助成

R2-R6 40件

若手研究者出版助成 学位論文をベースとした著書を出版することへの助成  
 「人文・社会系若手研究者 出版助成」(総長裁量経費) H22-R3 134冊  
 「人と社会の未来研究院若手出版助成」 R4-R6 22冊  
 助成をうけた出版を対象とした学会賞：令和6年度(2024年度)までに29件

令和6(2024)年度採択者

氏名	書名/出版社
中村 徳仁	シェリング政治哲学研究序説 ― 反政治の黙示録を書く者 / 人文書院
永盛 明美	眼差しの詩学 ― トマス・ハーディに見るジェンダー表象の一側面 / 英宝社
藤原 征生	芥川也寸志とその時代 ― 戦後日本映画産業と音楽家たち / 国書刊行会
高城 建人	韓国黎明期の民主政治への試み ― 大統領制と議院内閣制の攻防 / 明石書店
澤西 祐典	ひつじ研究叢書(文学編) 18 芥川龍之介における海外文学受容 ― 旧蔵書越しに見える風景 / ひつじ書房
佐々木 幸喜	安部公房×科学 / 臨川書店

KYOTO UNIVERSITY

5

## 大学院人間・環境学研究科の研究面での特色ある取り組み

### 研究支援：人文学連携研究者

京都大学における人文学の研究を一層発展させることを目的に、文学研究科、人文科学研究所と人間・環境学研究科が協議して、2018年に設けられた制度。人間・環境学研究科では、**博士学位を有する者またはそれと同等以上の卓越した研究能力を有する優秀な若手研究者を受け入れ、2年間(ただし、延長される場合があります)にわたって専任教員と連携して研究活動を進め、人文学の優れた研究成果を発信しています。**

令和6(2024)年度採用者

研究者氏名	受入教員	研究課題	受入期間
西内 亮平	戸田 剛文	イギリス経験論の自然観と神	2025.4.1~2027.3.31
金田 伊代	佐野 宏	神道と近現代の精神医療史	2025.4.1~2027.3.31
楊 慧京	佐野 宏	日本語学史における神代文字の影響について	2025.4.1~2027.3.31
三好 志尚	山村 亜希	近世港湾都市における産業の発展と空間構造変化に関する研究	2025.4.1~2027.3.31
村上 晴澄	山村 亜希	近世初期の徳川將軍上洛に関する歴史地理学研究	2025.4.1~2027.3.31

KYOTO UNIVERSITY

6

## 大学院人間・環境学研究科の研究面での取り組み

### 研究成果発信・地域連携

#### 研究成果発信

- 学会発表・著書・論文投稿
- 『人環レビュー資料編』を作成し、Webで公開（1回/年度）
- 学術雑誌『人間・環境学』の発行（1回/年度）
- 広報誌『総人・人環フォーラム』の発行（1回/年度）
- 各学術分野による研究冊子（紀要）の発行 16誌
- 教員活動データベースの更新（大学HPで公開）
- 公開講座の開催（1回/年）
- 学術講演会などの主催
- 国際シンポジウムや学会大会への協賛

#### 地域連携

- 出張講義・訪問受入
- 兼業による地域貢献
- 共同研究の実施

7

## 大学院人間・環境学研究科の研究面での取り組み

### 学会発表・著書・論文投稿

#### 総合人間学部学生（R2-R6）

- 学会発表件数  
国内学会 14件（うち筆頭著者 11件）  
海外学会 1件（うち筆頭著者 1件）
- 論文数 8件（うち筆頭著者 4本）
- 各種受賞 15件

#### 人間・環境学研究科学生（R2-R6）

- 学会発表件数  
国内学会 663件（うち筆頭著者 484件）  
海外学会 162件（うち筆頭著者 146件）
- 論文数 447本（うち筆頭著者 300件）
- 各種受賞 116件
- 日本学術振興会特別研究員採用件数（DC1/DC2）64名

#### 教員（R2-R6）

- 各種受賞（学術関連） 30件
- 文系教員によって出版された著書数（単著・共著）  
日本語によるもの： 230冊  
外国語によるもの： 19冊
- 査読付き論文数（R3-R5）  
日本語によるもの： 53件  
外国語によるもの： 334件
- 各分野において卓越した水準（SS）にある著書・論文数（自己申告）  
著書 6冊  
学術論文（トップジャーナル）15報

8

## 大学院人間・環境学研究科の社会との交流・公開

### 公開講座

大学院人間・環境学研究科公開講座は、学問・研究成果の社会への還元を図るため、年に一度開催している行事です。

年度	テーマ	開催日時・場所
令和6年度	「AI時代の教育と文化」	2024年8月8日（木）午後1時30分～午後5時00分 京都大学 人間・環境学研究科棟 地階大講義室
令和5年度	「幸せに生きる」	2023年8月9日（水）午後1時30分～午後5時00分 京都大学 人間・環境学研究科棟 地階大講義室 オンラインを併用したハイブリッド開催
令和4年度	「世界情勢とエネルギー問題」	2022年8月9日（火）午後1時30分～午後5時00分 京都大学 人間・環境学研究科棟 地階大講義室 オンラインを併用したハイブリッド開催
令和3年度	「令和と宇宙時代」	オンラインで開催 公開期間：令和4年3月16日（水）～5月31日（火）
令和2年度	「オンライン授業を覗いてみよう。専門を他者に語る～私たちの教育実践」	オンラインで開催 公開期間：令和3年2月15日（月）～3月31日（水）

### 特別公開講座

年度	テーマ	開催日時・場所
令和6年度 特別公開講座	「学問で平和はつくれるか？ —私が総合人間学部と人間・環境学研究科で学んだこと」	2024年10月31日（木）午後3時00分～午後6時00分 京都大学 人間・環境学研究科棟 地階大講義室

KYOTO UNIVERSITY



9

## 大学院人間・環境学研究科の社会との交流・公開

### 出張講義・訪問受入

高等学校などへの出張講義を実施しています。また高等学校等からの大学訪問を受け入れています。

令和6（2024）年度実績の一部ご紹介

【出張講義】

学校名	職	講師	実施内容	実施日
① 洛星高等学校	准教授	福谷 彬	進路講演	2024年06月01日
② 大阪府立茨木高等学校	教授	角 大輝	「学問発見講座」 カオスとフラクタルの体験	2024年07月13日
③ 熊本県立第一高等学校	教授	日置 尋久	令和6年度(2024年度)進路選択に向けたキャリアガイダンス「AI探訪—現在と未来」	2024年09月27日
④ 京都府立菟道高等学校	教授	藤田 健一	創立40周年記念講演会講演	2024年10月02日
⑤ 京田辺市立室内小学校	教授	立木 秀樹	子どもの知的好奇心をくすぐる体験授業—京都大学と京都府教育委員会との連携事業 タイトル 「イマジナリキューブ・パズル」	2025年01月09日
⑥ 城陽市立青谷小学校	教授	立木 秀樹	子どもの知的好奇心をくすぐる体験授業—京都大学と京都府教育委員会との連携事業 タイトル 「イマジナリキューブ・パズル」	2024年12月05日
⑦ 京都府立洛北高等学校	助教	小西 隆士	スーパーサイエンスハイスクール事業「課題探究IIアドバンスセミナー」	2024年10月18日
⑧ 京都府立北嵯高等学校	教授	久代 恵介	子どもの知的好奇心をくすぐる体験授業—京都大学と京都府教育委員会との連携事業「運動がうまくなる方法を本気で考える」	2024年10月16日
⑨ 京都府立清明高等学校	教授	中嶋 節子	子どもの知的好奇心をくすぐる体験授業—京都大学と京都府教育委員会との連携事業「京都のまちと町屋の成り立ち」	2024年11月18日

KYOTO UNIVERSITY

他、計15件

10

## 大学院人間・環境学研究科の社会との交流・公開

### 出張講義・訪問受入

高等学校などへの出張講義を実施しています。また高等学校等からの大学訪問を受け入れています。

令和6（2024）年度実績の一部ご紹介

【訪問受入】

学校名等	職	講師	実施内容	実施日
① 滋賀県立膳所高等学校	教授	渡邊 雅之	量子力学：光と電子の不思議な世界	2024年11月15日
② 滋賀県立膳所高等学校	教授	吉田 寿雄	触媒・光触媒と環境・エネルギー	2024年12月06日
③ 大阪府立天王寺高等学校	教授	瀬戸口 彰浩	生物多様性はなぜ大切か	2024年05月31日
④ 大阪府立天王寺高等学校	教授	戸田 剛文	普段の生活から哲学を始める	2024年05月31日
⑤ 福井県立藤島高等学校	教授	佐野 宏	研究室訪問	2024年07月25日
⑥ 水戸第一高等学校附属中学校	教授	石村 豊穂	学際融合（学術越境）って？～異分野が出会って新たな視点につながる。そして、違った視点で見ることが出来ることの大切さ～	2024年11月07日
⑦ 兵庫県立長田高等学校	教授	久代 恵介	特色類型(人文・数理探究類型)の大学研究室訪問 「運動がうまくなる方法を本気で考える」	2024年08月02日

KYOTO UNIVERSITY

他、計17件

11

## 大学院人間・環境学研究科の研究面での特色ある取り組み

### 研究公正

人間・環境学研究科では、京都大学研究公正推進アクションプランに則り、学術活動（研究及び学習）を公正に推進するため、学生に対しても積極的な取り組みを行っています。

#### ①ガイダンスでの学生への「公正な学術活動」の啓発

学部生及び大学院生に4月のガイダンスや研究公正パンフレット等で啓発

#### ③大学院生への論文執筆教育

- ・4月に全教員に対し研究公正チュートリアルの実施について指示
- ・論文調査報告書にチュートリアルの実施日を記載することとし、4月のオリエンテーションで周知
- ・大学院共通科目「研究倫理・研究公正」を必修科目とし、その講義の中で日本学術振興会「研究倫理eラーニングコース」を受講
- ・博士学位論文審査要項において剽窃チェックツール（iThenticate）の利用を周知

KYOTO UNIVERSITY

#### ②学術マナー教育

- ・授業担当教員に対し、研究公正委員会文書を毎年3月にメールで周知するとともに、研究公正パンフレットを配布
- ・授業担当教員に対し、研究公正eラーニング研修の受講を要請

#### ④教員・研究者への対応

#### ⑤研究データ保存

#### ⑥環境の整備

12

発行日 2026年（令和8年）2月  
発行人 京都大学総合人間学部／大学院人間・環境学研究科  
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町  
Tel 075-753-6533